

〔凡例〕

対象…筒井寛秀氏所蔵文書のうち、成巻文書および未成巻などの古代中世文書、さらに影写本『筒井寛聖氏所蔵文書』のみに見えるもので、かつ未翻刻分を紹介するものである。すでに翻刻のあるものは刊本情報を記載し、本文は省略した。

配列・文書番号…現在の所蔵整理状況の順に配列している。成巻文書は、(巻数)——(卷子内部の順)である。「未成巻」「別置」は成巻以外のもの。また「影写本」は影写本『筒井寛聖氏所蔵文書』のみに採録のものである。

改行…原則、原本の改行による。

字体…原本の表記にかかわらず常用字を使用した。判読不明文字については、☒ で表記し、一部は不能箇所を図版をあげた。抹消文字…抹消された文字は、×にて始まる傍注で示した。

一—— 院庁問注記

※平安遺文三九九八別案、本文は別案と同文につき省略。
(端裏書)
「伊賀国問注記養和元年 東大寺」

二—— 東大寺衆徒等重申状案

※三重県史黒田莊九三四、鎌倉遺文未収

二—— 玉瀧莊文書引付注文

※三重県史黒田莊四三一

二—— 紙背 某書状

条々委承候了、
只今念可参御壇
所候之間、不能委細
之状如件、

八月廿一日 □□

二—— 黒田莊相論事書土代

※三重県史黒田莊四三〇

二—— 黒田莊文書引付注文

※三重県史黒田莊四二九

二—— 飛驒莊坂所田数注文案

※東大寺文書未成巻一——二四——五七七——一の別案
(端裏書)
「飛驒莊寛光所進文書」
(飛彈庄一)
(異筆一)

「東大寺印蔵御公驗案文」
(異筆二)
「正文在文図、件文載大和所々庄之、」

飛驒坂所

壺町参段式佰玖拾式歩在処図内、

乗田七段二百四十歩

墾田六段五十二歩

天平勝寶八歳十二月十三日

高市郡擬少領无位高市連廣君

上件三処勘国司

擬大領從七位上高連屋守
(市脱)

正七位上行大目船連心庶呂
(以麻力)

從五位下行介大倭伊美吉束也

(紙継目裏花押)

二―六 東大寺政所飛驒莊上司職補任状

※平安遺文二六〇四

二―七 大井莊石包名等所当算用状

※鎌倉遺文二九四五七、岐阜県史大井莊古文書三二一

二―八 東大寺別当定親御教書

※鎌倉遺文八三九二、岐阜県史大井莊古文書二一〇

三―一 東大寺政所大井莊下司職補任状

※鎌倉遺文八五四三、岐阜県史大井莊古文書二二二

三―二 東大寺別当聖基御教書

※鎌倉遺文八八二六、岐阜県史大井莊古文書二二四

三―三 東大寺衆徒大井莊下司職宛行状

※鎌倉遺文九八四三、岐阜県史大井莊古文書二二二

四―一 東大寺惣寺大井莊下司職補任状案

※鎌倉遺文一七〇五一、岐阜県史大井莊古文書二五七

四―二 東大寺政所大井莊下司職補任状案

※鎌倉遺文一七〇五三、岐阜県史大井莊古文書二五八

四―三 東南院大井莊下司職安堵状案

※鎌倉遺文一七七〇六、岐阜県史大井莊古文書二六二

四―四 西室院大井莊下司職安堵状案

※鎌倉遺文一七七〇七、岐阜県史大井莊古文書二六三

四―五 僧隆実大井莊下司職讓状案

※鎌倉遺文一七八三〇、岐阜県史大井莊古文書二六六

五―一 大井莊検注名寄帳

※鎌倉遺文一八八五六、岐阜県史大井莊古文書二八五。接続復元は後掲の未成巻―一号参照。

五―二 慶秀名所当注文案

※鎌倉遺文一八八五二、岐阜県史大井莊古文書二八〇

六―一 大井莊百姓分検注名寄帳

※鎌倉遺文一八八五七、岐阜県史大井莊古文書二八六

- 七―一 茜部荘下村方年貢絹綿送進状
※鎌倉遺文二二一四、岐阜県史茜部荘古文書二二三
- 七―一 東大寺定使濃州下国入目注文
※岐阜県史大井荘古文書補遺二三
- 七―二 東大寺定使濃州下国入目注文
※岐阜県史大井荘古文書補遺二三
- 七―三 学侶方濃州入用引継注文
※岐阜県史大井荘古文書補遺二四
- 八―一 笠置寺山僧信空申状案
※鎌倉遺文一六七四五
- 八―二 東大寺別当御教書案
※鎌倉遺文一六七一二
- 八―三 銭司荘源範宛行田畠注進状案
※鎌倉遺文一六七四七
- 八―四 千鶴丸陳状案
※鎌倉遺文一六七一六
- 八―五 笠置寺山僧信空書状案
※鎌倉遺文一六七一八
- 八―六 笠置寺山僧信空重申状案
※鎌倉遺文一六七四六
- 八―七 笠置寺山僧信空書状案
※鎌倉遺文一六七六七
- 八―八 実延書状案
※鎌倉遺文一六七六八
- 八―九 笠置寺山僧信空書状案
※鎌倉遺文一六七六九
- 八―一〇 笠置寺牒状案
※鎌倉遺文一六九三六
- 八―一一 笠置寺牒状（後欠）
※後掲の二八―三号に接続。前掲八―一〇号文書の正文。同文につき省略。
- 九―一 大部荘百姓等重申状

※鎌倉遺文一八七三四、兵庫県史大部莊四〇、小野市史二六八

文和四年十月十一日 真蓮（花押）

九―二 光嚴上皇院宣

※兵庫県史大部莊一八三、小野市史四二二

一〇―二 大部莊公文孫九郎久忠後家性阿重陳狀

※鎌倉遺文二七九六六、大日本古文書東大寺文書之十九第一一

八七号（一）、兵庫県史大部莊一〇〇、小野市史三三〇

九―三 播磨守護赤松義則奉行人連署奉書

※兵庫県史大部莊二二六、小野市史四七六

一〇―三 福田莊百姓等申狀

〔端裏書〕福田莊百姓等起請文 文永五年十月五日

九―四 垣屋豊遠問狀案

※兵庫県史大部莊二七四、小野市史五三三

福田御庄百姓等謹言上

早欲仰損亡蒙 御免花嚴会米間事

九―五 野間統久書狀案

※兵庫県史大部莊二七五、小野市史五三四

一〇―一 僧真蓮陳弁告文

真蓮歎申入子細事

右於当寺御事、忽緒申之条、無跡

形事候、都以不存別心委曲、就中彼

善鐘寺止住事、雖及多年、無子細之处、

無咎牢籠之間、歎申入許也、仍仰理運之

御裁許上者、争可有不着所存候哉、

若偽申入者、

奉始日本国中大小神祇、殊大仏四王

八幡大菩薩御罰於可罷蒙之状、如件、

欲蒙 御免之状如件、

大仏八幡、春日權現、惣日本国中大小神祇神罰冥

罰、罷蒙所百姓口身者也、若申者無虚言者、早任先例

文永五年十月五日

尔部依宗（略押）

高向友近（略押）

額田助友（略押）

坂部行友（略押）

草賀定弘（略押）

尔部包正（略押）

僧淨徳（略押）

僧印実（略押）

紀末弘（略押）

高向友本（略押）

同宗友（略押）

沙汰人蔵円（裏花押）

一〇―四 下司職掌首伯朝葛申状

※鎌倉遺文二九六一九

一一―一 安倍寺別当僧頼慶解

※平安遺文一六二五

一二―二 東大寺解

※平安遺文一七五一

一二―三 藤氏長者宣

※鎌倉遺文二九六五八

一一―四 崇敬寺牒状

※鎌倉遺文二九四九九

一二―五 崇敬寺牒状
（端裏書）

「崇敬寺請文」

謹請 御牒状事

可令致御遷宮御祈禱状

右来廿七日、無風雨之難、無障于

遷宮之様、御祈禱殊抽丹誠、可

令勤仕之由、満寺可令披露候、仍所請

如件、
（嘉元四年）

八月十一日

崇敬寺僧

一二―一 東大寺政所下文案

※平安遺文一四九一

一二―二 東大寺政所下文案

※平安遺文一四八三

一二―三 東大寺政所下文案

※平安遺文一四八二

一二―四 東大寺政所下文案

※平安遺文一四八〇

一二―五 東大寺政所下文案

※平安遺文一四四二

一二―六 東大寺政所下文案

※平安遺文一四三一

一三―一 兵庫嶋関所雜掌珎賢申状土代

※鎌倉遺文二四三六〇、兵庫県史兵庫関一七

一三―二 大仏殿燈油納所雜々注文

※鎌倉遺文一八五一四、三重県史黒田莊九〇〇

一三―三 某起請文（前後欠）

※兵庫県史兵庫関二七、鎌倉遺文未収

一三―四 隆遍起請文

敬白天判起請文事

右事元者、今月一日之御集会之

時、隆遍奉対 政所、致悪口

由、依被聞食、蒙御罪科

之間、且其恐不少候、仍奉

捧起請文於衆中候之趣大

付 政所御事、無悪口仕分候、
又於心中聊無存悪口仕分
候き、

右以前条々、若称申虚言

候者、奉始惣日本国主

天照大神王城鎮守諸大

明神、殊大仏四王八幡三所

春日権現部類眷属、別

二月堂大聖觀自在尊神

罰冥罰、每隆遍之八万

四千毛穴罷蒙天、可現世二ハ

受白癩黒癩苦報、当来墮

八寒八熱地獄候状、如件、

徳治貳年五月 日 隆遍（花押）

一三―五 細川政元奉行人奉書案

※兵庫県史兵庫関三二七

一三―六 大仏殿燈油領山城国散在田畠注進状

※山城町史史料編第二章第四節二五

一三―七 大仏殿燈油領山城国散在田畠注進状

※山城町史史料編第二章第四節二二

一三八 楞伽院算用状
(端裏書)
「楞伽院算用状」

楞伽院算用状自応永十三年正月一日

至同七月十九日分

収納分

合

五百四十二文 去年仕残当年渡

五貫三百五十二文 奉加分正月ヨリ七月十九日マテ

六貫九百七文 当年地子成分正月ヨリ七月十九日マテ

百二貫五百九十文 米売代分

七貫五百文 唐船事付料足

八貫文 (周防国熊毛郡・厚狭郡)
束荷・厚東名年貢代

都合百参拾貫八百九十四文

油并雑用所下

正月分

五百四十一文 最勝王経時雑用 正月十一日

四百二文 祈禱布施心経廿九日

一貫七百二十四文 雑用 正中中

以上二貫六百六十七文

二月分

百二十五文 柱へイノ料

百二十七文 結桶賃

百三十文 竹へイ

二百三十文 炭二荷

一貫六百四文 雑用 正中中

以上二貫二百十九文

三月分

三百七十文 屋ね葺賃并硯水等

四百五十文 塩買代

十三貫二百四十二文 造作方材木代

十七貫二百七十七文 造作方木工作料并硯水等合定

四百八十文 炭四荷

十二貫六百九十六文 油買代

四貫五百文 上下夏衣物下行

二貫六百二十八文 雑用 三月中

以上五十一貫六百五十五文

四月分

二百文 コンカウシヤウリ大仏殿料

百文 吉野へ参祈禱料

三百三十九文 祈禱布施心経

一貫文 茶代 坊主違例時

二貫文 茶雑用等二油倉へ遣

一貫九百十七文 雑用 四月中

以上五貫五百五十六文

五月分

七百五十文 (蓮実)
西迎上人御忌日戒壇院へ、并湯

二貫八百五十文

雑用五月中

此内一貫文手搔

以上三貫六百一文

六月分

百文

塩一斗一升代

四百七十一文

茶ツミチン三度分

八十文

炭一荷

一貫五百七十五文

雑用六月中

以上二貫二百三十二文

閏六月

二百八十一文

茶ツミチン二度分

五十二文

塩四升

五百文

素麵高野中坊進

一貫六百九十六文

雑用壬六中

以上二貫五百三十五文

七月分

八百七十二文

ス、ハキ雑用

二百文

ツルトウ帷一下行

二貫五百文

釜代良園方へ下行

五百一文

坊主定時雑用

二百十文

ウリ等十五日盆結等料

三百十三文

雑用七月十九日マテ

以上四貫五百九十六文

都合七十五貫七十文 正月ヨリ七月十九日マテ

所下分

渡申分五十五貫三百十六文

五百八文失墜歟、

惣都合百参拾貫八百九十四文

右大概所勘定之状如件、

応永十三年丙戌七月十九日

後見 良園（花押）

良学（花押）

小比丘元祐（花押）

一四—— 貞治書下（折紙）

山城国聖護院之

御門跡領大柿庄内

東大寺燈油料

参反事、不可有

子細候也、仍状如件、

応永十九十二月六日 貞治（花押）

東大寺侍者御中

一四—— 安倍資行書下（折紙）

※山城町史史料編第二章第四節二〇

一四—— 安倍資行書下（折紙）

去年五月奉書一紙ニ

成候処、面々当身

可給由承候間、各別
折紙重候、

吐師庄之内

東大寺大仏殿

燈油田壺反

加地子分事、彼

雜掌可渡申

由候也、猶々不可有

異儀候也、恐々謹言、

嘉慶元五月十八日 資行(安倍)
(花押)

茨木殿

庁鼻和殿

一四―四 大仏燈油田油公事納帳 (折紙)
〔端裏書〕
「小山殿」

アフラノ公事

嘉慶元年十月廿八日

免二合

徳八合代六十四文宛

一反六十四文上 又二郎

一反六十四文上 助太郎

一反六十四文上 三学院

一反六十四文上 覚円

一反六十四文上 辻坊

只今納之分

一四―五 大仏殿仏供田渡状 (折紙)

大仏殿の御仏

供田壺段、鹿山寺

僧作五斗、同御油

田壺段、壺斗五升分

法樂寺領内尺迦二郎

作分以下、任御奉

書之旨、東大寺へ

渡申候了、仍状如件、

嘉慶元年十二月廿三日

信光 (花押)
家継

東大寺雜掌

一四―六 安倍資行書下 (折紙)

大仏殿御燈油

下地壺段、大柿

庄内にて、作人

西小田原禪衆・

山臥にて候之間、

此下地事、惣寺

大仏殿燈油内

無子細地候歟、

一返にて手私^(渡力)

候事無子細候、

乍去彼下地ハ

渡申て候事候間、

不可有済候也、

恐々謹言、
^(室町前期) ^(安倍)

七月八日 資行^(花押)

柿本殿

一四―七 地藏院正真書状^(折紙)

尚々辰巳方へ

此段堅申付候

上、不可有御聊爾候、

清冷院与辰巳方

公事辺、既悉以

無為落居候上者、

就燈油御下地、

聊以不可有違

乱妨之儀候由、

申付候、早々地子

御収納可然候、恐々

謹言、

^(室町後期)
辰三月廿二日 地藏院正真^(花押)

大仏殿燈油御納所

一四―八 後川莊百姓等申状^(折紙)

※兵庫県史後川莊六

一五―一 一乗院政所下文

※鎌倉遺文二四八四九

一五―二 東大寺別当御教書

※鎌倉遺文六二四三、三重県史黒田莊六九九

一六―一 東大寺材木所納木屋敷地坪付注進状

※平安遺文一八〇五

一六―二 大仏殿仏供免田注進状

※平安遺文二八二二

一六―三 大仏殿仏供免田注進状

※平安遺文二八二一

一六―四 興福寺西金堂満衆等解案

※平安遺文三五四七

一六―四―紙背一 実遍書状断簡^(前後欠)

※裁断による前後欠

浅猿候、御下向何比候哉、

可然者、此間日記、可罷上候也、

恐々謹言、

(嘉応二年カ)

正月十二日

実遍

一六―四―紙背二 暹寛書状

御京上之由、一切依不承及候、

其時也不参上候、遺恨、

抑彼御執事ハ、一定暹寛可

勤仕候歟、然者、今年世間艱難

之上、私又弥無力無沙汰、鎮西米

到来候者、任先例、納所可然之

様可令申宛御候、不然者、定及

闕如候歟、入其御者、難叶候之

由、能々可令言上御候、万事只

可令察御候、幸忽御京上

尤悦思給候、依無力、臨時及闕如候

者、惣為寺家不便候、別私又且

為恐、且為恥、凡思遣方所及也、御

下向何比候哉、恐々謹言、

(嘉応二年カ)

暹寛

威儀師御房

一六―四―紙背三 某書状

一日見参こそ方々大切

候しか、何比にか南京へ令下□

覧、今両三日も候者、今

度見参大切に候者、令参候

はん、如何様明日十五日料小□

一切不候に、もし小分候なん□

いかさまにても候ぬへけれとん

明日者態可候事など承候、

もしやとて令申候也、謹言

(嘉応二年カ)

(花押)

威儀師御房

一六―四―紙背四 某書状(後欠)

※嘉応二年のものか。裁断による後欠。

東大寺雑役免中西庄

之内三丁五段、自往古

為璉瑠寺之領、行幸御

参宮之屯食之役、北野

柴垣等、无懈怠所被勤仕

来也、随今度御寺、依 宣□

所被切宛紅花也、加催之处、

自東大寺被行来之役勤仕

之由庄民申、不致弁済、如□

依庄民難渋之由申候、少分
事宛催而、致懈怠也、各

一六―四―紙背五 寛承書状（後欠）

※裁断による後欠。

依此事、常申驚□

尤下支□候歟、恐怖

不少候歟、謹言、

昨日御路次之便、不遂

見参、怖畏遺恨無極

候者也、今明ハ聊公事

出来、可馳走候也、其後

必可企参上之由、思給

候者歟、抑彼下人

陳状事、見参面謁

申処ハ題如□候、住人

更不信伏候歟、仍随

仰、早作人末次□々

等可召上候也、何日許

可宜候乎、可仰給候者

（嘉応二年カ）
正月十九日

寛承

一七―一― 藤原康朝請文案

※鎌倉遺文二五五三五

一七―二― 東大寺梵網会用途料施入田坪付注進状

※鎌倉遺文三二六〇

一七―三― 三条前中納言家雜掌慶清重申状

※兵庫県史史料編中世五撰津国猪名荘・長洲荘七五

一七―四― 大井莊検注名寄帳（前後欠）

※鎌倉遺文一八八五八、岐阜県史大井莊古文書二八七、接続復
元は後掲の未成巻―一号参照。

一七―五― 一七―五―八 蒲御厨年貢銭算用状（前後欠）

※静岡県史二二四〇、一〇―五・六・七・八、二四―一の順
に接続。

一七―六― 蒲御厨年貢銭算用状断簡

※静岡県史二二四〇

一七―七― 蒲御厨年貢銭算用状断簡

※静岡県史二二四〇

一七―八― 蒲御厨年貢銭算用状断簡

※静岡県史二二四〇

一七一九 隆賢書状

※岐阜県史大井莊古文書五〇四、県史は南北朝期に比定するが、室町後期か。

一七一〇 大仏殿燈油方納所英運文書勘渡帳

勘渡帳 天文十三

- 一、結解交名 数通
- 一、本燈油納帳 四十四帖
- 一、結解状 十五卷
- 一、前々寄進状 廿三通
- 一、寿徳院寄進状
- 一、證芸往来 一
- 一、前勘渡帳 数通
- 一、英訓三ヶ年間寄進状
- 一、筒井円智房寄進状
- 一、帳箱 大小四
- 一、錢櫃鏽鑑有之 一
- 一、鑑 六
- 一、新燈呂帳 八十三帖
- 一、前寄進状等重書箱在之
- 一、升又ロクロ一大小八
- 一、起請文数通在之
- 一、寿徳院八段田券文

一、龍雲院寄進状

一、専観房券文二通

一、杉屋敷家立時請状

一、杉大上寄進状

一、大森券文等

一、良禅房買徳券文

一、下笠間替地券文

一、龍徳寺寄進状

一、快憲寄進状

一、市橋書状等

一、春芸寄進状

一、快憲切符三通

天文十三年七月六日

納所英運

一七一 得富忠兵衛書状

一書言上申候、仍我等手前不相成付而、御米かり候て、たへ申し候、又御正税領壺石七斗六升之有所作仕候、御土貢米共二都合十式石六升御未進仕申候間、他借仕、御調可申与存候へ共、借米無之条、右之為返弁、給地之内濱明壺町分米五石五斗之有所、

右之未進分ニ上申候、元利御算用候て、相澄申候者、何時成共返可被下候、乍去、大坂弥右衛門所まて右之米取かへ候て給候へ之（紙継目黒印）由申遣候間、若相調候者、御請取頼申候、無之候て無是非候、親候者以来不断国衙ニ罷居候て、御奉公仕候へ共、又武家えも奉公仕、給地共取候て罷居候つれとも、林彦左衛門有国、此方者親候者、老人ニ而持申候、（得書）国衙給地分之儀も式つ二分候て、五左衛門与我等持候而、不断国衙一篇ニ罷居御奉公仕申候、然者、午ノ歳給地分、一円二日ニやき申候て、少々之所務仕候、（得書）其後打つゝき風儀悪敷ニ上ニ加賀守遠行仕物とも入申候上ニ、又去々年亥歳、大日照仕、悪所式町三反持申候、（紙継目黒印）給地之内式町壺反者、一円日ニやき候て、所務不仕候、式反壺石六斗之有所ならてハ、少たすかり不申候故、手前礮不相成候間、四五ヶ年之御隙被下候者、何方えも奉公仕候て、めし共もらい

申候度之由、（上司昌綱）上平兵衛方を以、（訓賢）正源院様へ御理申上候へ共、一円無御分別候、其後上（高歳）司七郎右衛門方、亥ノ冬、南都え被罷上候ニ付而、右之御理申上候へ共、無御分別候条、又子ノ六月ニ上司七郎右衛門方、南都え被罷上ニ付而、とかく御公儀え（浄観）奉公共仕儀、無御分別候て、内々上生院様も左様ニ被成御意候条、爰許方御正税米運上候間、加様之儀も被仰付候て、舟手共仕下人共（紙継目黒印）あまた抱置候間、舟共かひ候て成共、左様之儀も仕、地下ニ堪忍仕、御寺之御奉公も仕度之由申上候へ共、他人之つミ申候運賃も又我等舟二つミ申候運賃も同前之入目ニ候へ共、是又無御分別候へハ、手前礮不相成、御米共かり候て遣申候、給地分一円二日ニやき申候段、今度上落之衆中に可被成御尋候、偽無之候、（秀就）毛利殿様御奉公之衆者、亥ノ歳御給地分、日ニやきなされ候衆へ者、高百石ニ七十三石宛、御蔵納を以、被遣候間、かり候てたへ候ても代所ニ給地分引上宛申上者、御分別奉頼候、於委細者、兩人可為言上候、恐惶謹言、

慶長十八年寅

(紙継目黒印)

六月廿四日

得留忠兵衛 (観相)
(花押)

東大寺

御沙汰人様人々御中

一七一―一二 得富忠兵衛書状追而書

追而申上候、国衙所務之儀、申ノ歳ヨリ

当年まで六年取沙汰仕候へ共、御公儀方之

儀も又他所方きすニ罷成候儀も又外聞ニ

成申儀も地下中少も不仕候、為御

寺之可然儀者、二ツも三ツも仕置候、

然上者、当年方者、爰許越判之

儀、何れの人ニ成共、仰可令付候、両人之

儀者、其元被罷上候条、様子可被申

上候、恐惶謹言、 (黒印)

慶長十八年寅

六月廿四日

得留忠兵衛 (観相)
(花押)

東大寺沙汰人衆様人々御中

一八一― 東大寺年預五師浄観書状土代 (折紙)

貴礼之趣満寺へ申聞候、

(良意)
法輪院者被背寺法度、萬之

失究候故、任老若一味之

上、令処一生不免之罪科候、

此上再被致帰寺候事、

南都両寺之掟、縦自往古

至于今不_(×趣)乱之間、以御分

別 御上意之旨御取成

所仰候、其上御公儀

難計候付而、円光寺江

得貴意被報之上を以

如此候、即持参候、其後彼仁

御奉行衆へ度々被致御

訴詔、從惣寺段々申理

問答事旧候、此両三院与

法輪院、私之出入雖無之候、難

背御紙面之上候間、從惣寺

為使節差越候、惣別当

寺之為躰、零落之砌候

間、寺法度相立候様、

御取成可奉願之旨、満寺

之集会一同候、

猶両三人可被奉得尊

意候間、今者略候、

恐々謹言、

(慶長十七年)
林鐘廿三日 東大寺年預五師浄観

追而 (×伊豆山般若院)

(×能々被仰聞候而可被■候)
■大油煙拾挺進上誠恐入候、

(長安)
大久保石見守殿

人々御中

一八一二 東大寺年預五師淨觀書狀案(折紙)

追而為此三人致罪科

取沙汰儀、更以無御座候、

滿寺集会之上、(元信) 円光寺

迄得御意候之上二而、

一生不免之罪科仕候、

弥御分別可然様奉頼候、

以上、

態令啓達候、先年

(良意) 法輪院惡逆相積候付、

滿寺一同之評議、近比

御寺奉行円光寺迄

得御意御報之上二而、

一生不免之罪科仕候、

即出入之書物等、此

使僧持参仕候、惣別

一生不免之罪科、免除之儀者、

東大寺・興福寺往古

以来無之儀候之条、弥

御上意之儀、寺法度

相立申様ニ御取合、滿寺

可為衆悦候、恐惶謹言、

(慶長十七年)
林鐘廿三日 東大寺年預五師淨觀

(崇伝)
金地院玉床下

一八一二 紙背 東大寺年預五師淨觀書狀土代(折紙)

雖未申通候令啓候、仍而

(良意) 法輪院 ■ 離寺付 ■、

被得御上意之趣、從

(大久保長安) 大石州守殿預示候間、使節

差越候、彼仁者、被背寺法度、

萬之失究候故、任老若

一味之旨、令処一生不免之

罪科候、此上被致還住

候者、從前代之寺法度

不相立候間、御分別所仰候、

僧者一世、寺者末代

一 ■ 仁を被引立候御事候間、

徒衆等歎入候、彼仁

定而於其表、当寺之

仏法 ■ 退伝(×由)之様 ■

被申触候哉、至于今寺

役等事闕候儀、毛頭
無之候、惣別之為余仁■

■者朝弄誹謗被致
我身、猶(輕騰)高举仁候故、

大衆与不聊罷成候キ、
且者当寺零落之

砌候間、被■任御興
隆、再不被寺住候様ニ

□異見偏二頼存候
由、満寺之集会

評議二候、恐惶謹言
(慶長十七年)
六月廿三日 東一浄観

伊豆山般若院報床下
追而両三院与

法輪院、何之出入無之候、
故不■顧難儀、大油煙

拾挺進越候、以上、

一八—三 東大寺年預五師浄観書状土代(折紙)

從前々被成御存知候
(良意)
法輪院出入付、使節

差越候、彼仁者、板伊州守殿并
(板倉勝重)
御奉行衆へ前々雖御理

雖被申候、其寺之法度
(御力)
×××

被仰渡候キ、先年(頼慶)遍照光□(院)

不致組南都之諸寺仁、私之
書状を遣、端々被改候、

殊当寺之寺僧等可
迷惑多々全非一候、

一生不免之罪科仕候、
若 □ □ □ 候

本願以来之掟、此度
御乱之事(衆僧)■
御乱之事(快運)■□

「般若院」
「無異□
奉頼□老□□
集会」

謹言、
(慶長十七年)
林鐘廿三日 浄観

金地院「
浄観

追而両三院与
法輪院出入無之

□哉□□□□

一八—三—紙背 東大寺年預五師浄観書状案(折紙)

追而為此両三人致
罪科之取沙汰儀、更以

無御座候、満寺集会之上

（元信）
円光寺迄得御意候而、

一生不免之罪科仕候条、

弥可然様ニ御分別

奉頼存候、以上、

態令啓達候、先年

（良意）
法輪院惡逆相積、

申付満寺一同之評議、以

御寺奉行円光寺迄

得御意、御報之上ニ而、

一生不免之罪科仕候、

即出入之書物等、此

使僧持参仕候、惣別

一生不免之罪科免除儀、

東大寺・興福寺往古

以来無之儀候条、弥

御上意・寺法度

相立申様ニ御取合、

満寺可為衆悦候、

（慶長十七年）
恐惶謹言、

林鐘廿三日

（長安）
大久保石見守様

人々御中

東大寺年預五師浄観

一八―四 東大寺年預五師浄観書状土代（折紙）

（端裏書）
「下案 四通」

雖不寄思召儀ニ候、

令啓達候、仍大衆与法輪院与

（良意）
出入候付、離寺被仕候、

然者被達 上聞、

可致還住之由候、委

曲金地院被存候間、

（可）
■御前之趣、

□然様ニ御取成

可奉頼旨、満寺之

集会評議候、

（慶長十七年）
恐惶謹言、

六月廿三日

（正純）（介）
本田上野守殿

人々御中

追而雖難儀候、

大油煙拾挺進上候、

以上、

一八―四―紙背 東大寺年預五師浄観書状案（折紙）

追而為此両三人、致罪科

取沙汰儀、更以無御座候、

満寺集会之上、一生不免

罪科仕候、弥可然様ニ
御分別報頼候、

已上、

態令啓達候、先年

(良意)
法輪院惡逆相積候付、

以満寺一同之評議を

御寺奉行円光寺迄
(元信)

得御意御報之上ニ而、

一生不免之罪科仕候、

即出入之書物等、此

使僧持参仕候、惣別

一生不免之罪科免除申儀ニ

東大寺・興福寺往古

以来無之儀ニ候条、弥

御上意之儀、寺法度

相立申様ニ、御取合

満寺可為衆悦候、

(慶長十七年)
恐惶謹言、

(林鐘廿三日)
東大寺年預五師浄観
(正純)
本田上野守様

人々御中

一八一五 東大寺衆会事書案（後欠）

※鎌倉後期のものか。

被衆徒僉議稱、元興寺領播磨

国穂積庄下司景実法師無障

悪行重疊之間事、雜掌解如此、

子細見于状候歟、件無障乍居地下

所職、悪行非法濫吹狼籍之至、重

科非一歟、為世為人、不可不誠乎、

是則無嚴密之沙汰者、非啻当

時庄家之牢籠、可胎後代所務之

非例乎、就中、料庄之顛倒者、

寺用闕乏必然歟、七寺之興廢

一八一六 二月堂修中日記抜書

長祿四年庚辰当和尚重円法印、六日日中ニ法衆

不調ニ楚忽ニ入内陳、被差□畢、依之、時導師

立、雖然、非帰参候旨、自法衆告之間、時導師も

則額木之内入了、其後和尚為満衆帳外ニ被出了、

如此折限和上被出、先規在之歟之趣、少々雖在

憶念之人、今度者、既ニ時導師立間、珍事不可然、

仍後年於参籠者、停止之、乍去於御堂旧老之

間、当修中者、不能出堂、又未来練行衆擯出ノ

儀者、不可有之通、当参娑婆練行衆

少々、於宿所、当参衆相共評定畢、

以上

同時、於和上以後入内陣、遅参^{延營五師ハ}過候程、十四日帳外

之時、於内陣及評定、任先規、於外礼堂、千数返可被増処二、為古職之間、故実以於宝前被増数返畢、宿所残モ其評定在之畢、

以上

一九一一 尼戒妙大仏燈油田寄進状

※鎌倉遺文二一九四一

一九一二 東大寺世親講衆連署起請文（後欠）
〔端裏書〕
「文永三―十二月十八日起請」

世親講衆重起請

条々

- 一、不可同座于非道僧綱沙汰之間連判衆之中、或以寺恩被改補于他人、或云別院家給恩并僧坊供等令違乱者、与寺恩等新補之仁、永不可同座、彼所帶以下、雖一人、如元不被還与于本人者、先達講衆一同不見放之、都不随寺役、学道面々令逐電而、可交山林事、
- 一、依同沙汰、一味同心衆之中、自於有合于不慮之災難事者、各々面々存身上之大事、心之所覃、可加其沙汰事、
- 一、為講衆令露顕者、可烈之題目等評定事、不可令披露之、并以此次、為令落合于人、万事令加増者、令物語之、每事不可挿矯饒、又衆議之時、不偏執

可随多分之儀事、

右三ヶ条起請如斯、若此条々一々以於令違背之輩者、奉始大仏・四王・八幡、三所仏法擁護

春日權現、当寺勸請八大明神、天照大神、賀茂、北野、

熊野、金峯部類眷属、都大日本国中有勢無

勢大小神祇、当年行疫流行神等、七曜九曜廿八

宿十方三世一切三宝、殊二月堂觀音、世親并

自宗高祖諸大師等冥罰神罰、每違背輩

八万四千毛孔、具以可罷蒙之条、如件、

〔線で囲む以下同〕
文永三年十二月十八日 年預賢恵（花押）

擬議聖禪（花押）

永賢（花押）

源承（花押）

親慶（花押）

宗覚（花押）

宗成（花押）

盛玄（花押）

宗信（花押）

覚禪（花押）

親慶（花押）

定芸（花押）

頼承（花押）

權律師宗成（花押）

大法師重範（花押）

大法師光慶（花押）

大法師玄洌（花押）

大法師顯舜（花押）

大法師信禪（花押）

大法師頼尊（花押）

大法師範承（花押）

大法師円舜（花押）

權律師勝延（花押）

一九一三 某起請文

啓白 天ハチキシヤウモンノ事
〔起請文〕
〔罰〕

右、テンカイノサイシヤウトノ、イヤシ□^(転害)^(宰相殿)^(キカ)

チノ事ニヨキ候テ、スヘテシラス候

テ候ヲシリ候ハヌト申候モノナラハ、^(幡)^(堂)

大仏八マンナラヒニ二月タウトウノ

カフルヘク候、ヨモキシヤウモンク^(起請文)

ケンム^(建武)三年正月廿二日

※裏に大和両福寺(?)の牛玉宝印

一九一四 僧専懷起請文

※鎌倉遺文二六七八九

一九一五 某起請文

※岐阜県史大井莊古文書二七八

一九一六 東大寺学侶連署起請文断簡(前後欠)

※鎌倉中期のものか。

擬講信盛(花押) 慶兼(花押)

大法師範承(花押) 頼守(花押)

大法師円舜(花押) 定弁(花押)

大法師顕誉(花押) 快秀(花押)

大法師良舜(花押) 信弁(花押)

大法師重舜(花押) 快兼(花押)

大法師信遍(花押) 宗経(花押)

大法師良暁(花押) 快算(花押)

※裏に二月堂牛玉宝印

一九一七 東大寺学侶連署起請文断簡(前後欠)

※鎌倉中期のものか。

大法師慶尊(花押) 樹恩(花押)

大法師道舜(花押) 尊源(花押)

大法師良重(花押) 定舜(花押)

大法師賢清(花押) 盛玄(花押)

大法師慶誠(花押) 慶承(花押)

大法師快円(花押) 定芸(花押)

大法師良叡(花押) 頼乗(花押)

大法師定春(花押) 縁宗(花押)

(以下紙背)

大法師頼実(花押) 顕秀(花押)

大法師賢恵(花押) 玄親(花押)

大法師親玄(花押) □芸(花押)

大法師覚禅(花押) 宗信(花押)

大法師宗成(花押) 慶性(花押)

賢性(花押)

※裏に二月堂牛玉宝印

一九一八 四郎田直米請取状

※平安遺文二七四二

一九―九 僧隆暹供料米請文

※平安遺文一五三五

二〇―一 僧有順田地売券

※鎌倉遺文一九五六

二〇―二 僧定西家地讓狀

※鎌倉遺文一七一九

二〇―三 僧定西家地讓狀

※鎌倉遺文一五二八

二〇―四 文国友畠地売券

※鎌倉遺文一三四一

二〇―五 金峯山住僧湛有田地売券

※鎌倉遺文七六八

二〇―六 小野姉子田地売券

※平安遺文三九一九、三重県史黒田莊三七三

二〇―七 尼妙法家地讓狀

※平安遺文三六八二

二〇―八 大原吉宗田地売券

※平安遺文三四七九

二〇―九 高乃末武畠地売券

※平安遺文三四九九、三重県史黒田莊三二五

二〇―一〇 尊勝院々領田地売券

※平安遺文三〇四七

二〇―一一 僧某院領田畠売券

※平安遺文二八三三

二〇―一二 僧慶舜田地讓狀

※平安遺文二五六七

二一―一 春若丸田地売券

〔端裏書〕
「ナクラノ文」

〔裏書〕
「大仏殿御燈奇進了」

沽却 私領水田事

合老段小者

右件水田者、春若丸年来知行之私領也、
而依有要用、限直米玖斛十一合定、定意
讃岐公限永代令沽却之处、明白也、但地

子壺石参斗也、向後更不可有他妨、
若違乱事出来者、以本米可令返
進之状如件、但手次等相具畢、

文永二年卯月廿三日 春若丸（花押）

平氏女（花押）

地子壺石参斗也、

此内壺斗ハ不空院仏聖米也、為作人

沙汰、本所可弁壺石式斗ヲハ地主ノ方へ

無懈怠可沙汰者也、

二一—— 若江吉国田畠売券

※鎌倉遺文二〇六九一、三重県史黒田莊九三五

二一—— 僧慶縁田地売券案

※平安遺文一〇七〇

二一—— 尼妙蓮畠地売券

沽却 私領榎灰畠地新券文事

合式段者

在大和国添上郡左京五条二坊一坪之内

自道向西
二反三反
目合二反也

四至本券文具也

右件畠者、字亀松女法名尼妙蓮去暦応元年戊寅

十一月廿八日買得相伝之後、敢無他妨、然今依

有要用、限直錢拾貳貫文、相副次第手

繼證文等、永代所奉沽却於東大寺大仏

殿燈油料所、実正明白也、向後更不可有他

妨者也、仍為後日新立券文如件、

暦応貳年己卯二月廿五日 尼妙蓮（花押）

二一—— 東大寺惣寺利錢借請状

※岐阜県史茜部莊古文書四〇七

二一—— 国安田地作主職讓状

ゆつりわたすおりはしり上座田作事

合中式段者

右件者、国安進退作主識也、然而、依

為息女帛松女ニ讓渡物也、向後更々

不可有他妨物也、仍為後日、讓与状

如件、

貞和三年丁亥十一月廿四日 国安（花押）

国友（花押）

二一—— 僧尊詮家地畠処分状

※鎌倉遺文一九二〇

二二—— 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）

※二二—— 一より二二——二六は一連の請取であり、全点、墨斜

線にて文面を抹消する。

請取 八幡宮夏御供米事

合一口者
(河上荘、大和国添上郡)
右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑五月三日 神人家永(花押)

神主紀延説(花押)

二二―二 東大寺八幡宮夏供米請取状(切紙)
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年卯月十五日 神人国光(花押)

神主紀延説(花押)

二二―三 東大寺八幡宮夏供米請取状(切紙)
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑六月二日 神人貞用(略押)

神主紀延説(花押)

二二―四 東大寺八幡宮夏供米請取状(切紙)
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑五月廿八日 神人真時(略押)

神主紀延説(花押)

二二―五 東大寺八幡宮夏供米請取状(切紙)
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑五月十七日 神人貞次(略押)

神主紀延説(花押)

二二―六 東大寺八幡宮夏供米請取状(切紙)
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年卯月十八日 神人定清(花押)

神主延説(花押)
(紀)

二二―七 東大寺八幡宮夏供米請取状(切紙)
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年卯月十八日 神人家定(花押)

神主延説(花押)
(紀)

二二―八 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）

請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑卯月廿八日 神人国清（花押）

神主紀延説（花押）

二二―九 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）

請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑卯月四日 神人真次（花押）

神主紀延説（花押）

二二―一〇 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）

請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年卯月十八日 神人国永（花押）

神主延説（^{（紀）}花押）

二二―一一 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）

請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年卯月廿四日 神人春吉（略押）

神主紀延説（花押）

二二―一二 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）

請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑卯月十四日 神人真氏（花押）

神主延説（^{（紀）}花押）

二二―一三 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）

請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年卯月十五日 神人時真（花押）

神主紀延説（花押）

二二―一四 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）

請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年卯月十八日 神人真安（花押）

神主延説^(紀)（花押）

二二―一五 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑五月三日 神人真清（花押）

神主紀延説（花押）

二二―一六 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑五月三日 神人家行（花押）

神主紀延説（花押）

二二―一七 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑卯月六日 神人真房（花押）

神主紀延説（花押）

二二―一八 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）

請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年卯月十五日 神人清国（花押）

神主紀延説（花押）

二二―一九 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年卯月十五日 神人貞家（花押）

神主紀延説（花押）

二二―二〇 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑卯月十五日 神人国安（花押）

神主紀延説（花押）

二二―二一 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者

右自八名方所請取如件、

文明十三年辛丑卯月八日 神人春清（花押）
神主紀延説（花押）

二二―二三 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者
右自八名方所請取如件、
文明十三年辛丑卯月八日 神人春房（花押）

神主紀延説（花押）

二二―二三 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者
右自八名方所請取如件、
文明十三年辛丑卯月十四日 神人真久（略押）

神主紀延説（花押）

二二―二四 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者
右自八名方所請取如件、
文明十三年辛丑卯月十四日 神人時房（花押）
神主紀延説（花押）

二二―二五 東大寺八幡宮夏供米請取状（切紙）
請取 八幡宮夏御供米事

合一口者
右自八名方所請取如件、
文明十三年辛丑六月二日 神人貞家（花押）

神主紀延説（花押）

二二―二六 八幡宮供米請取状
請取 八幡宮御供米事

合三斗三升者川上定

右、河上自八名方、依寺門評定
為来朔日備進、所請取如件、

文明十三年辛丑三月廿八日神主延説（紀）（花押）

二三―一 東大寺政所切符

※平安遺文一五〇六

二三―二 東大寺政所切符

※平安遺文一五〇五

二三―三 東大寺出納国縁食料米請文

※平安遺文一五四四

二三―四 下司大仁王会布施料米請文

※平安遺文一五三四	九十帙澄賢大法師「奉」	十一十二帙賢重大法師「奉」
二三―五 堂司喬円仏供料米請文	十三十四帙弁範大法師「奉」	十五十六帙重融大法師「奉」
※平安遺文一五四〇	十七十八帙英真大法師「奉」	十九廿帙英覺大法師「奉」
	廿一廿二帙澄春大法師「奉」	廿三廿四帙俊憲法師「奉」
二三―六 食堂仏供料米請文	廿五廿六帙祐海法師「奉」	廿七廿八帙定祐法師「奉」
※平安遺文一五三八	廿九卅帙重誓法師「奉」	卅一卅二帙賢憲法師「奉」
	卅四帙実秀法師「奉」	卅五卅六帙実融法師「奉」
二三―七 僧永海夏衆僧供料米請文	卅七卅八帙春賢法師「奉」	卅九四十帙正実法師「奉」
※平安遺文一五三九	四十一四十二帙経雅法師「奉」	四十三四十四帙賢祐法師「奉」
	四十五四十六帙賢隆法師「奉」	四十七四十八帙承俊法師「奉」
二四―一 蒲御厨年貢銭算用狀断簡	四十九五十帙定尊法師「奉」	五十一五十二帙延管法師「奉」
※静岡県史二二四〇、一〇―五・六・七・八、二四―一の順に接続。	五十三五十四帙順実法師「奉」	五十五五十六帙盛宗法師「奉」
	五十七五十八帙成重法師「奉」	五十九六十帙英祐法師「奉」
二四―二 僧叡俊紛失狀	(導師) □□	
※平安遺文三九四八	一二帙大貳法印権大僧都「奉」	三四帙卿権少僧都「奉」
	五六帙大夫擬講「奉」	七八帙弁賢大法師「奉」
二四―三 東大寺八幡宮大般若経読誦衆請定	九十帙重円大法師「奉」	十一十二帙見賢大法師「奉」
廿二日巳鐘定	十三十四帙憲延大法師「奉」	十五十六帙盛賢大法師「奉」
請定 八幡宮大般若経読誦衆事	十七十八帙経真大法師「奉」	十九廿帙聡海大法師「奉」
導師 (異筆以下同) 導師	廿一廿二帙英乘大法師「奉」	廿三廿四帙浄俊法師「奉」
二帙辨法印権大僧都「奉」	廿五廿六帙経嚴法師「奉」	廿七廿八帙専蓮法師「奉」
(五) 三帙伊与権大僧都「奉」	卅帙経俊法師「奉」	卅一卅二帙良重法師「奉」
六帙帥擬講「奉」	卅三卅四帙賢真法師「奉」	卅五卅六帙経乗法師「奉」
		七帙伯耆擬講「奉」

〓卅七卅八帙長宥法師「奉」 (四十)	〓卅九四十帙經尊法師「奉」
〓〓一四十二帙隆晏法師「奉」	〓四十三四十四帙英円法師「奉」
〓四十五四十六帙盛海法師「奉」	〓四十七四十八帙經悟法師「奉」
〓四十九五十帙澄禪法師「奉」 (五)	〓五十一五十二帙実俊法師「奉」
〓〓十三五十四帙春海法師「奉」	〓五十五五十六帙寛延法師「奉」
〓五十七五十八帙澄宣法師「奉」	〓五十九六十帙嚴海法師「奉」
廿四日巳鐘定	
導師	導師
(一)〓〓二帙弁権大僧都「奉」 (五)	〓三四帙源春房権律師「奉」
〓〓六帙侍從擬講「奉」	〓七八帙融賢大法師「奉」
〓九十帙賢叡大法師「奉」	〓十一十二帙源隆大法師「奉」
〓十三十四帙經宗大法師「奉」 (十)	〓十五十六帙隆秀大法師「奉」
〓〓七十八帙快春大法師「奉」	〓十九廿帙延超大法師「奉」
〓廿一廿二帙清乘法師「奉」	〓廿三廿四帙澄実法師「奉」
〓廿五廿六帙隆胤法師「奉」 (廿)	〓廿七廿八帙祐成法師「奉」
〓〓九卅帙澄意法師「奉」 (卅)	〓卅一卅二帙英豪法師「奉」
〓〓三卅四帙慶憲法師「奉」	〓卅五卅六帙清嚴法師「奉」
〓卅七卅八帙曉俊法師「奉」 (四十)	〓卅九四十帙澄英法師「奉」
〓〓〓一四十二帙清尋法師「奉」 (四十)	〓四十三四十四帙祐清法師「奉」
〓〓〓五四十六帙定俊法師「奉」 (四)	〓四十七四十八帙經寛法師「奉」
〓〓〓十九五十帙憲春法師「奉」 (五)	〓五十一五十二帙亮信法師「奉」
〓〓〓十三五十四帙珎賢法師「奉」	〓五十五五十六帙祐宣法師「奉」
〓五十七五十八帙定秀法師「奉」	〓五十九六十帙賢慶法師「奉」

右於八幡宮、為寺社安全、守交名次第、可被
 參勤、為巳鐘刻限、交名字於不參仁者、学
 生供下行時、拾足宛可押之旨、依評定請定
 如件、

永享九年三月 日 年預五師英乘

二四―四 秋季因明講師問者請定案

請定 秋季因明講々師・問者事

可被講 法華經第四卷

可被談 因明四種相違義

講師 經実大法師

淨憲法師 実訓法師

晋英法師 盛賢法師

英澄法師 実延法師

英性法師

右依例請定如件、

慶安四年九月日

学侶年預実訓

二四―五 公意法印寄進講問衆請定案

〔端裏書〕
 「公意法印寄進講問請定慶長四己亥六月十日納所真海法印」

問題 無色天衆 勤行自我偈一返

同別車鉢 如心偈七返

請定 公意法印寄進講問衆事

学乗房法印権大僧都 了春房法印権大僧都 長乗房得業 了賢房 中将公 卿公 浄円房 少納言公 二位公 長円房 浄願房 少将公 禎教房 願勝房 円順房 帥公	講師 大夫法印権大僧都「奉」 深長房律師 明善房 順禎房 円乗房 貞願房 教識房 式部卿公 大藏卿公 乗賢房 了実房 正乗房 了泉房 浄恩房 禅栄房	二四―六 龍池祈雨最勝王經書写衆請定 請定 龍池祈雨最勝王經書写衆交名事 (異筆以下同) 一卷弁法印権大僧都「奉」伊与権大僧都「奉」少納言権大僧都「奉」
右来辰鐘定十日於八幡宮新造屋辺 可有参懃之状、如件、 慶長四年六月朔日	卿権大僧都「奉」 三河権少僧都「奉」 二卷 宰相権律師「奉」 帥権律師「奉」 武蔵権律師「奉」 三位法橋「奉」 若狹擬講「奉」 三卷大進擬講「奉」 専賢大法師「奉」 頼賢大法師「奉」 〃 叡承大法師「奉」 賢弁大法師「奉」 賢經大法師「奉」 四卷頼誉大法師「奉」 弘豪大法師「奉」 宗英大法師「奉」 俊専大法師「奉」 五卷 隆盛大法師「奉」 良俊大法師「奉」 寛英大法師「奉」	二四―七 八幡宮大般若經転読請定(前欠) 右明日廿八日午鐘以前可有書写之請定如件、 応永八年辛巳卯月廿七日 年預五師專賢
二四―六 龍池祈雨最勝王經書写衆請定 請定 龍池祈雨最勝王經書写衆交名事 (異筆以下同) 一卷弁法印権大僧都「奉」伊与権大僧都「奉」少納言権大僧都「奉」	經範大法師「奉」 頭祐大法師「奉」 蓮祐法師「奉」 六卷清覚大法師「奉」 憲弘法師「奉」 浄覚法師「奉」 玄円法師 円賢法師「奉」 七卷憲覚法師「奉」 〃 覺賢法師 弁賢法師「奉」 賢盛法師「奉」 〃 叡賢法師「奉」 融賢法師「奉」 八卷 英玄法師「奉」 融舜法師「奉」 賢海法師「奉」 宗円法師「奉」 〃 融舜法師「奉」 定喜法師「奉」 九卷 澄賢法師「奉」 清乗法師「奉」 〃 宗快法師 〃 実祐法師 〃 玄海法師 十卷 英実法師「奉」 俊憲法師「奉」 英賢法師「奉」	二四―七 八幡宮大般若經転読請定(前欠) 右明日廿八日午鐘以前可有書写之請定如件、 応永八年辛巳卯月廿七日 年預五師專賢

正尊法師「奉」(異筆、以下同) 經曉法師「奉」 定実法師「奉」
 祐海法師「奉」 源隆法師「奉」 經嚴法師「奉」
 弁範法師「奉」 専春法師「奉」 龍光法師「奉」
 重春法師「奉」 祐俊法師「奉」 清遵法師「奉」
 隆春法師 顯延法師「奉」 実秀法師「奉」
 重舜法師「奉」 經宗法師「奉」 重融法師「奉」
 盛賢法師「奉」 定經法師「奉」 賢真法師「奉」
 光隆法師「奉」 慶憲法師「奉」 英真法師「奉」
 光俊法師「奉」 光春法師「奉」 賢誉法師「奉」
 經乘法師「奉」 頼俊法師「奉」 春賢法師「奉」
 清嚴法師「奉」 聡海法師「奉」 超海法師「奉」
 澄春法師「奉」 光祐法師「奉」
 右来廿三日、学生供衆之内色衆外者、悉可被
 立于裏頭、於現病遠他行等之仁者、必以当
 寺分寺僧学生供之外、可被立于代官宛、
 以他寺并山寺法師、敢不可比立于代官、
 兼日於年預所辺、必可被宣綺由、若於不
 参之仁者、学生供下行之時、参百文宛可
 被押之由、依評議、所定如件、
 応永廿年卯月 日 年預五師清覚

二五—— 法華会豎義精義役請定
 可被用意法花会第二夜賢義精義役、
 所立転法輪章疏四種相違義

堯寛権大僧都「奉」
 右、可被用意之状如件、
 元倭(和)四年五月 日
 法印権大僧都訓賢

二五—— 法華会豎義問者請定
 可被用意法花会第二日豎義問役事
 所立転法輪章疏四種相違義
 一問尊弘権律師「奉」(異筆、以下同) 二問隆寛権大僧都「奉」
 三問範昭擬得業「奉」 四問訓寛得業「奉」
 五問実清権律師「奉」
 右可被用意之状、如件、
 元和四年五月日
 法印権大僧都訓賢

二五—— 東大寺別当御教書
 ※大日本古文書東大寺文書之十八第一〇七三号、平安遺文六〇
 九七、鎌倉遺文九七四一

二五—— 某書状
 南都元興寺御靈之宮神主
 出入条々被聞召处、双方被仰
 付之由尤候、猶委細其許
 参候節、可得尊意候、恐惶

謹言、

(江戸中期カ)
極月十日

☒治 (花押)

拝答 東大寺御寺中回鱗

二五―五 元興寺牒状

(行勇カ)

来七八月之間、為貴寺大勸進僧都之宿願、於大仏殿
可被行千僧供養候云々、先大願之趣、且被随喜候、件請僧内
興福寺定被招請候歟、其外寺々雖及無沙汰之御議、当寺
衆分不幾、雖少々可預御請定之由思給候、如何、
抑吾寺者、仏法僧雖衰微、諸供料雖失墜、忝 元明・
元正両御代之仁祠、時当郡当土三箇内寺門也、是以
俗暖称三箇寺本、何況蒙 宣旨、被御祈禱事于今
未絶、而今漏希代勝事之条、頗非無現当之恐れ、夫古
書曰、盛人非遠在近云々、就中、不顧非器、偏忘不屑、忝如此
請事者、殊以為近隣、被憐愍者歟、雖須触申本願上綱之
許、一向貴寺御進退云々、仍可牒申之旨、衆議候也、
以此旨可然之様加御詞、可令披露衆徒御中給候、
恐惶謹言、

(鎌倉中期)
六月十九日

元興寺執行浄俊奉状

謹々上 東大寺年預五師御房

二五―六 東大寺牒状

※西田友広「鎌倉後期の石山寺と権門寺院」(『東京大学史料編纂所研究紀要第一八号、二〇〇八年』)にて復元翻刻。

二五―七 東大寺年預五師寛英文書記録勘渡帳

※三重県史黒田莊一三五四、小野市史四七四、岐阜県史茜部莊
古文書四四四

二六―一 東大寺学侶連署断簡(前後欠)

※鎌倉前期のもの。料紙下一段に連署する。紙幅の都合により。
改行を/で示し、追い込みにて翻刻する。

伝燈法師範口(花押)／伝燈法師真慶(花押)／伝燈法師勝円(花押)／伝燈法師玄暁(花押)／伝燈法師光慶(花押)／伝燈法師玄洌(花押)／伝燈法師重範(花押)／伝燈法師融慶(花押)／伝燈法師重寛(花押)／伝燈法師順珎／伝燈法師重賢(花押)／伝燈法師良成(花押)／伝燈法師恵胤(花押)／伝燈法師敬円(花押)／伝燈法師恵行(花押)／伝燈法師蓮涼(花押)／伝燈法師円玄(花押)／伝燈法師弁覚(花押)／伝燈法師顯盛(花押)／伝燈法師尊忍(花押)／伝燈法師玄真(花押)／伝燈法師行実(花押)／伝燈法師堯尹(花押)／伝燈法師聖円(花押)／伝燈法師寛覚(花押)／伝燈法師乗恵(花押)／伝燈法師頼勝(花押)／伝燈法師実玄／伝燈法師業範(花押)／伝燈法師明真(花押)／伝燈法師円頭(花押)／伝燈法師慶実(花押)／伝燈法師勝弁(花押)／伝燈法師性運(花押)／伝燈法師貞運(花押)／伝燈法師貞

俊（花押）／伝燈法師増恵（花押）／伝燈法師玄深（花押）／伝燈法師蓮秀（花押）／伝燈法師定尊／伝燈法師寛賢（花押）／伝燈法師良詮（花押）／伝燈法師昌海（花押）／伝燈法師頼澄（花押）／伝燈法師情範／伝燈法師順慶（花押）／伝燈法師頼弁／伝燈法師弁寛（花押）／伝燈法師光寛（花押）／伝燈法師慶範（花押）／伝燈法師定成（花押）／伝燈法師勝寛（花押）／伝燈法師隆性／伝燈法師継寛（花押）／伝燈法師光喜（花押）／伝燈法師定禅（花押）／伝燈法師忠範／伝燈法師恵舜（花押）／伝燈法師玄範（花押）／伝燈法師弁俊（花押）／伝燈法師覚如／伝燈法師勝延（花押）／伝燈法師恵玄（花押）／伝燈法師範舜（花押）／伝燈法師蔵円（花押）／伝燈法師承性（花押）／伝燈法師道源（花押）／伝燈法師弁源（花押）／伝燈法師盛真（花押）／伝燈法師光暁（花押）／伝燈法師長弁（花押）／伝燈法師覚源（花押）／伝燈法師実遍（花押）／伝燈法師良玄（花押）／伝燈法師隆慶（花押）／伝燈法師慶賢（花押）／伝燈法師定慶（花押）／伝燈法師実寛（花押）／伝燈法師貞尊（花押）／伝燈法師重禅（花押）／伝燈法師忠賢／伝燈法師定覚（花押）／伝燈法師恵賢（花押）／伝燈法師定俊（花押）／伝燈法師順恵（花押）／伝燈法師興尊（花押）／伝燈法師信玄（花押）／伝燈法師乗慶（花押）／伝燈法師雅詮（花押）／伝燈法師重慶（花押）／伝燈法師慶真（花押）／伝燈法師定遍（花押）／伝燈法師永厳（花押）／伝燈法師賢信（花押）／伝燈法師仁忠（花押）／伝燈法師教俊（花押）／伝燈法師弁性（花押）／伝燈法師玄珎（花押）／伝燈法師重祐（花押）／伝燈大法師頼覚（花押）／伝燈大法師隆円（花押）／伝燈大法師実親（花押）／伝燈大法師聖俊（花押）／伝燈大法師寛紹（花押）／伝燈大法師祐円（花押）／伝燈大法師寛顕（花押）／伝燈大法師雅慶（花押）／伝燈大法師義海／伝燈大法師円聡（花押）／伝燈大法師乗信（花押）／伝燈大法師賢恵（花押）／伝燈大法師印賢（花押）／伝燈大法師厳寛（花押）／伝燈大法師荣源（花押）／伝燈大法師弁修／伝燈大法師道仁（花押）／伝燈大法師乗玄（花押）／伝燈大法師弁盛（花押）／伝燈大法師増玄（花押）／伝燈大法師宴信（花押）／伝燈大法師定教／伝燈大法師教玄（花押）／伝燈大法師珎永（花押）／伝燈大法師辰寿（花押）／伝燈大法師信全（花押）／伝燈大法師仁弁（花押）／伝燈大法師慶源（花押）／伝燈大法師印豪（花押）／伝燈大法師寛詮（花押）／伝燈大法師珎乗（花押）／伝燈大法師顕昭（花押）／伝燈大法師叡詮（花押）／伝燈大法師堯慶（花押）／伝燈大法師秀恵（花押）／法橋上人位寛詮／権律師貞禅／法眼和上位定寛（花押）／法眼和上位尊信（花押）／法眼和上位聖詮（花押）／権少僧都尊玄（花押）／（※二行分あけ）／伝燈法師位弁真（花押）／伝燈法師位玄良（花押）／伝燈法師位禅恵

二七 本覚断惑抄（浄実私記）（断簡・袋綴）

※省略。

二七―紙背― 増井初左衛門書状

尚々近比ほしいまゝ
の事ニ御座候へ共、茶
上之かたく御断被仰
御返し可被下候、自然ハ
取たりなとニなして
壺枚斗ハそへ候て成共、
御返し可被下候、理兵
御しかり候之旨、我等
持候事成かたく候、
此程段ニハほしかり候へ共
我等所望仕上セ候間、
のほセ申候、
御断被仰、御返し
可被下候、謹言、
一書致啓上候、其元
御堅固ニ御座候由、目
出弥重ニ奉存候、爰
元も和田理兵殿初、
我等一類共ニ無事ニ罷
有候、御心安可被思召候、

随而、春中御下し

被成候茶碗、少大ふりニハ

御座候へ共、此手之茶

碗壺つも二つも御座候ニ

付候子共、殊ニハ和田理兵殿、

別而御しかりいたさる

道具あつめいたし候、

坊主方へ返し不申候由、

出入、茶も吞間敷由

被申候、自由成仰ニ候へ共

もとへ御返し被成候て

可申候也、子共しかり候事ハ

何とも不存候へ共、道具

すき仕候由、理兵事

外しかり候、失礼迄も

御しかり被成候而、不存是非候、

此躰程ニハ爰元ニ而も

皆々ほしかり候へ共、我等之

手前ニ置不申候、人ニやり

候へハ、以来失礼之申分

無御座候而、如此ニ而思而

可得尊意候、恐惶謹言、

（江戸前期）
卯月廿八日

増井初左衛門（花押）

四聖坊様□□□

二七―紙背二 斎多藤左衛門書状

「成御儀ニ御座候へとも

「此書状、半田理助殿へ被成

「被下候、奉頼存候、

「キ比御上洛之由、承申候、

「付来春御参上、面々

「得御意候、以上、

(一) 筆致啓上候、先度者

□ 川越ニ初而奉得尊意、

忝奉存候、然者其元ニ

半田理助殿と申候御方へ

西神五兵衛殿より御状参

□ 候、是ハ先日川越ニても

□ 仰聞候、五兵衛殿御茶代

□ 判壺両上り申候、于今

□ 助殿より不参候ニ付申入候、

□ 慮外千万、御六ヶ敷御儀ニ

□ 座候、奉頼存候、何様

期後音之時、万々可得尊

□ 候、恐惶謹言、

(江戸前期) 十一月廿一日 上林慶左衛門内齊多藤左衛門 (花押)

二七―紙背三 某書状案

※江戸前期のもの

昨日者致参之期、閑談

大慶奉存候、従是罷登

候節斗ニ帋子一面進上

仕候、謹幾久々義ニ御座候、

中々不建事刻、※以下書かず。

二七―紙背四 某書状(折紙)

※料紙上部及び左端を裁断する。

「拝尊書辱令

「御誦候、☒山ニ

「御住不仕☒被

「☒、一昨延引候

「☐貴命を承者

「☐はと☐事☐☐☐

「☐事☐☐☐

「☐以来、☒☒

「☒☒☐☐

「☒☒非☒☒

「☐か様与風其地へ

「☐令参上之条、必々

「令伺候、可申候てほと

「☒☒殿、只事ニ

「□成可得候、御承て

罷下可申間、被見廻

可申候、猶期来顔

之時候、恐惶謹言、
(江戸前期)

六月十二日

××兵衛 (花押)

二七―紙背五 福寿院幸賢書状

重宝之諸白老樽、被送而

被承存候、委曲此者申入候、以上

新春之御慶、千万

目出度申納候、然者御

祈祷之札等、送進入

仕候、末久御頂戴可被成候、

長日於 社頭寺内

繁盛如意御満足候、可

抽懇祈候、猶期

後喜之時候、恐惶謹言、
(江戸前期)
正月六日 愛宕山福寿院幸賢 (花押)

二八―藤原資実書状

(端裏書)
「尼真妙狼籍文書」

尼真妙訴事、重

陳状令 奏聞候了、

重可問真妙之由、被仰下

候、仍仰遣別当僧正許

候也、子細又申御使

了、恐々謹言、
(建仁元年)
四月十二日 右大弁資実

二八―二 西大寺惣中願書

覚 西大寺

寺被官目安指上候由

承候、付御理申上候条々、

一、西大寺領三百石之内九拾六石余、本田内記殿御下之

百姓、往古より雖出作仕候、毎年構私曲を度々不被謂

義多御座候故、御公儀へ御理り申上候処ニ、理非

御裁許を以、去ル四年以前二田地被為召上られ候処、

不斜忝奉存候御事、右之田地寺被官卅余人

御座候者ことニ申付、近年作らせ候処ニ、寺被官ノ内

四五人一揆を企、当年毛付時分ニ、田地寺へ指上候故、

残別百姓ニ申付、作らせ候へハ、還而寺より田地取

上候由申上候事、大ニ相違仕候、

一、郡山御領分之内式百拾四石余、寺被官前々より出作

仕候処ニ、本田内記殿御入国之時分、二三ヶ年も正二

月迄立毛を立置候故、殊外曲事ニ罷成、田地

被召上候、其時寺被官右之田地永々指上候処、

実正也、以外百姓申分少も無御座候趣、状を仕候而、

慥ニ郡山江田地指上候故、其後二三ヶ年も過候而

寺中よりあはれミを以郡山へ御侘言仕、内證

御同心被成候故、他領之庄屋二三人かたらひ、於郡山

御年寄ハ則庄屋共語来ニ仕候而、寺被官ニハ下作ニ

致させ候由、右之田地何時成共、可被召上旨、御理リ

にて御座候、然処ニ本■地九拾石余を替地ニ被下由

申候事、是以各別之義御座候、并先祖よりの田地ニ

はなれ迷惑仕候由申上候へ共、寺地百七拾石余を

作仕候故、田地ニ事闕候義、少も無御座候、

一、野上村役米之義、式石余御座候、是以百姓之支配ニ

可仕物にてハ無御座候故、本蔵ニ納置□百姓之折を

みはからい合力仕候、則三ヶ年以前ニも日損ニ而御座候故、

蔵米四五石取出遣申候、是以彼役米等も御座候故也、

加様之慈悲をも、はや忘候而、剩へ御公義へ目安

指定事、以外成徒者ニ而御座候、是迄も寺中へ対

度々曲事多御座候へ共、長袖故候、何共はからい

かたく堪忍仕候、幸此度為御仕置ニ、二・三人之

徒者共籠者ニ被仰付、可被下候、末代ニ御興隆と

思召候而、御法度ニ被仰付候由、於本中ニ忝可奉存候、

為其書付を以、申上候、以上、

右之条々被為聞召分、彼徒者暫召

（時枯）
明曆三酉六月日

中坊 御奉行所

西大寺惣中

二八―三 笠置寺目代定算奉書（前欠）

※八―一 一号と接続。

二八―四 室町將軍家御教書案

（端裏書）
「当寺長老 右京大夫勝元」

東大寺戒壇院造営事、為

奉加料、被差遣勸進僧、受戒

法侶人別拾疋、於俗舍輩者、家別

壺疋宛、被相触五畿七道、就

要脚到来、可被遂造功之由、所被

仰下也、仍執達如件、

享徳二年十一月四日 （細川勝元）
右京大夫御判

（能範）
当寺長老

二八―五 室町將軍家御教書案

※二八―四号の別案。ほぼ同文につき省略。

二八―六 舞装束在所注文（切紙）

舞装束等在所事

平録面ハ 侍従上座之

沙汰ニテ ×××



出納交替之了、

（×帖）被借之了、

於真装束二具ハ、大三郎志

許在之、
(×帖)
聖裝束一具久繁之許
(×失敷)
■在之、

依出納申状注之、

嘉元四年十一月七日

出納為元（花押）

二九一 東大寺三綱連署申状

※平安遺文二〇九六

二九一 興福寺大衆等解写（後欠）

※平安遺文七―三六四六の別案だが、文言が異なる部分が多々

ある。紙背に書状の習い書きがあるが省略する。

古今雜筆私撰集牒状部第一 息悪完宋撰

興福寺大衆等牒

欲早遂対面、決両門雌雄状

牒、兵者凶器也、戦者逆徳也、在俗猶猷之、出家誰好之、

然而身子之留智恵焉、乗勝負而拉牢戾之輩、天帝之

多慈悲矣、争雌雄而、返修羅之軍ヲ、粵我等者、当来

導師之大慈尊之門徒也、悪侶莅境之時、動樊嚙之毗ヲ、而

降伏之ヲ、善友来告之日、引陳那之説而教化之、不運

強哭之方便者、争全像末之人法哉、抑貴山祖師

者、我寺仁師之孫弟也、血脈惟芳、礼儀盡通、□□□稍

遠南北不和、□□□起「災禍、不図之外

「□如此」
(軍大以防之、夫一天之下莫不カ)
「王土、九垓之中

誰非 公民、縦着緇衣豈編」
(金輪与、其カ)
「官軍何致構戦ヲ、

敢非本意、又為謀叛解群ヲ、而止有眼、貴寺及近日残

新雜議、從洛外可進下之由所令風聞也、我等大慶以底

如旃、所以牒送平等院、修理宇治橋、又仰雍湖山城之村同ニ

令鐘征路之嶮岨ヲ、七寺之儲既以丁寧也、三塔之励晩何

子来哉、於ヤ戲嚙鏃在是時、雖寸歩、汝達不可劫北ニ矣、

斬旗期何日、雖一瞬号我等不可顧南ニ焉、以彼一時之強弱、

宜定両門之優劣ヲ、自今已後、未決之先、猥吐乙甲之詞、

勿紊華夷之聴ヲ、仍粗注由緒、牒送如件、乞也察状、莫以遲

引、故牒、

承安三年十月五日 興福寺大衆

二九一 僧円意起請文

※鎌倉遺文補七〇一

二九一 東大寺大勧進七ヶ年造営注進状案

※裏打ちにより端裏書読めず。

注進 当大勧進七ヶ年間致造営分

一、八幡宮後廻廊代百三十石

一、拝屋代八十石

一、八幡談義屋代百四十石

以上三百五十石

此外瓦用途致沙汰分

東室大房瓦 大講堂廊瓦 西室小子房瓦

已上用途七百餘貫

都合米三百五十石 錢七百餘貫也

每年自両国運送之分四百餘石歟、然者、七ヶ年分三千餘石、其内三分之二私用之条顯然也、

正応元年十二月廿一日 注之

先々大勸進皆以有造営之実、為散御不審、実相聖人
十一ヶ年間修造之分注之、

一、二月堂 五間四面瓦葺

一、法花堂礼堂 面五間瓦葺

一、三面僧房小子坊東北西都合三面七十六間

一、三面僧房之大坊内作

一、三間四面瓦葺戒壇四天王堂并四天王像造立之

一、鐘樓并鐘鑄之

一、四足二字

一、食堂戒壇院之食堂

一、庫裏

一、戒壇受戒壇銅塔鑄之

一、大仏南面柱取替之

一、大講堂軒廊・大仏殿廻廊・三面僧坊等作合樋

合九支長五丈、廣二尺五寸、厚一尺三寸

一、南大門前橋 南水門橋 西水門橋 今小路前橋

戒壇前橋 東塔前橋 中御門橋 八幡宮御前橋

大仏中門前橋

一、八幡廻廊皮檜朽損之間葺之、

凡十一ヶ年間修造之分、大概如此、此用途員数及于数万貫歟、

二九―五 唐禅院跡舍利出現記
〔端裏書〕

「戒壇院金塔舍利由来」

建治二年三月十四日酉刻自唐禅院跡、仏舍利堀出畢、凡唐禅院者、鑑真和尚旧跡、当寺規模之靈

地也、而顛倒之後多年之間、僧院無跡、俗舍並レ檐、

爰定親僧正寺務之時、撤却数多人屋一、建二立一

宇仏閣ヲ、其後、当時石壇聖西迎上人、頻發二再一

興之大願一、先為四方築地、勸二進士民一、令レ弘二荊一棘ヲ

之處、西北角有ニ大一塚一、為ニ成シカニルホリ一、鑿一之處、自ニ

垣一根一堀ニ出白瑠璃壺一、口三寸許、即当ニ鉢、碎レ三、但仏舍

カキネ一、少々散一在畢、于レ時、中道上人并聖然最前自ニ真言院一、馳

向、彼一砌一奉レニ入件仏舍利於香箱一、則所奉之也云々、

建治二年丙子文龜元年辛酉迄二百廿六年当、凡此記

東大寺密乗坊・禅春坊ヨリ写給也、此仏舍利者、月

氏国勝軍大王之分布梵僧五千粒持、大唐鑑真

和尚与其内三千粒和尚持将来、一千粒者招提寺、一千粒
聖武天王、一千粒唐禅院也、

二九一六 六波羅下知状

※鎌倉遺文二〇四六一

二九一七 法橋某書状（前欠）

（御）□塔真「□□□□□□□□

早切候、此則 先師御超恩候「

誰人か致疎略、又発不和候歟、御「

候はんと存候へとん、自然之事もや「

申上候許也、為御存知如此言上候「

恐々謹言、

（鎌倉時代力）
二月二日

法橋（花押）

二九一八 東大寺学侶連署断簡（前後欠）

※鎌倉中・後期のもの。

大法師頼舜（花押） 賢恵（花押）

大法師信経（花押） 隆重（花押）

大法師信盛（花押） 顕春（花押）

大法師頼尊（花押） 聖融（花押）

大法師範永（花押） 良叡（花押）

大法師慶重（花押） 貞賢（花押）

良重（花押）

大法師良舜（花押） 道舜（花押）

大法師信遍（花押） 重舜（花押）

大法師真叡（花押） 顕誉（花押）

大法師賢清（花押） 義慶（花押）

大法師慶成（花押） 栄兼（花押）

大法師快円（花押） 良暁（花押）

大法師定春（花押）

二九一九 東大寺学侶連署断簡（前後欠）

※鎌倉後期・南北朝期のもの。

擬講慶性（花押） 寛□（花押）

大法師定舜（花押） 清覚（花押）

大法師定弘（花押） 瞻暁（花押）

大法師実専（花押） 寛専（花押）

大法師実清（花押） 清寛（花押）

大法師実清（花押） 玄守（花押）

大法師実清（花押） 宗舜（花押）

大法師英覚（花押） 勝定（花押）

大法師定弁（花押） 継舜（花押）

大法師快玄（花押） 重順（花押）

大法師寛祐（花押） 源重（花押）

大法師賢継（花押） 弁誓（花押）

大法師明尊（花押）

光隆（花押）

大法師慶^(算?)（花押）

慶承（花押）

大法師頼尊（花押）

良寛（花押）

大法師寛舜（花押）

宣舜（花押）

大法師定賢（花押）

隆円（花押）

大法師経算（花押）

兼真（花押）

大法師永俊（花押）

堯快（花押）

大法師頭賢（花押）

有清（花押）

二九——〇 陰陽寮怪異勘申状写

陰陽寮

東大寺言上怪異吉凶如何

今月二日未時大仏湿始、自御躰至花

台流水充溢、

占、今月二日辛丑時、加末五月節大吉、臨丑為用

将青龍中河魁、将大裳終小吉、将天后

卦遇伏吟物五墳四殺、

権之怪所、長吏及丑未寅申年人有

病事歟、期怪日以後廿五日內、及来

十一月十二日節中並丙丁日也、何以

言之、用起辰上卦遇物五墳四

殺之故也、件年人至期慎之、無



其咎哉、

天喜六年六月廿二日

權助兼権陰陽博士安倍朝臣有行

主計助賀茂朝臣道平

主税頭兼陰陽博士巨勢朝臣孝秀

三〇—— 某書状礼紙

※鎌倉遺文二二〇七

三〇—— 檢非違使別当藤原信清書状

※鎌倉遺文二二二一

三〇—— 檢非違使別当藤原信清書状

※鎌倉遺文二二二三

三〇—— 檢非違使別当宣

※鎌倉遺文二二三

三〇—— 檢非違使庁召文

※鎌倉遺文二二二〇

三〇—— 左衛門尉中原明基書状

※鎌倉遺文二二二四

三〇―七 検非違使別当宣

※鎌倉遺文一二二五

三〇―八 左衛門尉中原明基書状

※鎌倉遺文一二二六

三〇―九 左衛門尉中原明基書状

※鎌倉遺文一二二八

三〇―一〇 検非違使別当藤原信清書状

※鎌倉遺文一二三〇

三一―一 僧重深東大寺八幡宮百座仁王講料田地子并下行記録

※三重県史黒田莊七八七

三二―一 美濃茜部莊年貢支配置文

「庄勤行并供料等支配事

一、勤行

転経 春自二月八日至十四日

秋自九月八日至十四日

春大般若經一部六百卷

秋金剛般若經百部一千卷

談義 春自三月一日至廿一日

秋自八月一日至廿一日

三論宗春嘉祥釈 秋浄影釈

花嚴宗春香為釈 秋清凉釈

右別奉為 栢原天皇・皇后并朝原酒人内親王

等御菩提、惣為 聖朝安穩・国土泰平・仏法興隆・

人法繁昌、百口学生并両宗学侶等、殊疑精誠可

勤仕之、

一、□□^(料カ) 乃貢仮令千貫定依年損可不定^(ママ)

半分五百貫内

四百三十九貫参百百口 五十貫七百御寺務

五貫 引手 五貫 年預

半分五百貫内

二百貫談義春五十貫秋百五十貫 三百貫庄務正員・代官

右任 綸旨并御事書旨、大概支配之、至治定

員数者、任年損遂勘定、追此分限可配分之、

以前条々、任本願内親王御素意并今度御

寄附 歡情趣、所被定置也、向後堅守此

旨、不可有違失之状、如件、

建武元年十月十八日

三二―二 東大寺別当聖珍?御教書

「八月廿五^(端裏書) 御卷数 輔法眼御房 嘉尋

執金剛神祈禱事^(建武二八廿五)

御祈禱御卷数、以長官被^(小槻冬直)

進候之处、殊以目出之由、其

沙汰候者候、追可被仰遣年預候歟
(顯寛)

之由、可申旨候也、恐々謹言、
(建武二年)

八月廿五日 嘉尋

輔法眼御房

三二―三 東大寺律家評定記録

※三二―三〇五は、料紙および汚損・虫損など一致する。もと

右端中央にて紙縫り綴じか。ただし当該箇所は虫損により判断不能。

一、記録 律家評定二ヶ条事

右件子細者、大仏殿修正初夜導師之布施物付、雖

經上一臈職、及毎年之未下間、為一臈「

次第也、而追年之分、于当座不被置之者、不可

随彼役者也、次夏燈毎年未下之分式石

御教書在之、并当年之夏燈未下等、悉

無下行之儀者、大小之寺役并大仏殿之

修正以下不可随其役者也、若於此二ヶ条事、

少分下行之時、可道行旨評定仁出来之

時者、縦雖被經登四人之大、不可及同座対面

之儀旨、十月仁七ヶ日之間、惣寺祈祷於□□□

老若皆参会合之評定、事切之間、及律家

沙汰人記録畢、雖為向後可被□此旨、記録

之状、如件、

貞和三年丁亥十月廿日

両諸進 定清 (花押)

(以下紙背)

快春 (花押)

宮「 止住
「永賢大法師 (花押) 堯弁大法師 (花押)

聖弘大法師 (花押) 良兼大法師 (花押) 実乗大法師 (花押)

止住・筆師

賢祐大法師 (花押) 良俊大法師 (花押) 信賢大法師 (花押)

筆師

貞和三年丁亥十二月晦日戌時神興、大仏殿ヨリ本社エ還御、訴訟伊賀事也、而同正月一日ヨリ大仏ヲ「□□

之由ヲ堂へ被催之間、夏燈之油未進之記録之旨

不相叶者、不可随役由、兼テ申置上者、難治之由ヲ

申処、同四年正月朔日、年々之未下□二石代二貫文

并当年之御油未下行、堂ニ一斗宛合二斗宛御

下行、而間正月二日修正始行之畢、

両堂律家衣文作法之事

四人之大者法印位二同、上衣ノ下ニ五色ヲ着スヘシ、有文ヲモ用

□ハ着ニ文□モ用、重衣ノウラ紫紅ノ絹ニテ合ス、戒和上又ハ

読師者、宣下ノ高僧ナレハ、院家二同、七夜之大分者上葉ニ

同ス、上衣ハ下ニ五色ノ用、重衣ノ下絹青染ヲ用「

帽子綿ヲモ用、次ノ十人ノ読経僧者□「

「得業同シ、上衣ノ下ニ青黄無文ノ二色ヲ用「

「帽子絹薄墨用、襪ヲモハクナリ、次ノ中臈ハ

学侶二同、上衣下黄□□着ス、余可知是也、

三二―四 東大寺律家評定記録

貞和四年十月三日、律家集会偁、二箇条
記録、律家七夜導師読経僧并吉祥衆之間事
右子細者、兩堂上七人之供料也、而於吉祥呪師者、為
淨行之役間、若七人之同無呪師之器用時「
補兩堂之淨行臈次二、為律家之巡供料故也、若
其身者雖為重病遠他行、被補任之、可被代官
立也、若又於為其身一向之非蜜時者、補任之条、非
限沙汰者也矣、

重記兩堂通夜衆淨行仁付、雖為末座之若輩、
為受戒之出仕、或于大之役登、或致于律宗之役
間、未來之臈次輩、衆役大事付、被歎申
旨、尤有其謂歟、然者、設雖被致大之上座役、
於大悦經營者、相当次第臈次之時、可被勤
仕之、嘆読事者可任先規、依末座歎申、唱
律家嚴重之科集会、為未來□□各加連
判上者、雖為向後、可被守堅此旨、莫違失

(以下紙背)

貞和四年戊子 十月三日

兩諸進

定清 (花押)
快春 (花押)

兩筆師

頼印 (花押)
良兼大法師 (花押)

兩止住

永賢大法師

三二―五 東大寺律家評定記録

記 貞和四年十一月十五日律家評定謂

唐禪院兩止住雜事分地分事

右西方者、自順長坊大時、為唐禪院興行□□
間、自本坊西方ヲ被雜事分作、而其後者□□□
為有名無実間、円禪坊大止住刻、兩方同様二
分置之、為後代之間、律家之沙汰人嚴重之及
罰文、以丈尺定之畢、雜舍北浦者法花堂
方、本坊之西浦者中門堂方、際目定杭丁畢、
余殘所之畠、如前々兩方之計トシテ、如先規
可致沙汰之、為後代記之、

貞和四年十月十一日記之

兩諸進

定清 (花押)
快春 (花押)

兩筆師

頼印 (花押)

堯弁 (大法師)

聖弘大法師

玄乘大法師 (花押)

良快大法師 (花押)

信賢大法師 (花押)

実慶大法師 (花押)

兩堂二臈各

幸実法師
頼力
快春 (花押)

律家沙汰人 良宗

良兼（花押）

順清

覺弁
□祐

（以下紙背）

一、□□一段之事、律家大事和上助成之事

可積之处、不可積之評定畢、為明□大悦并

出衆方善春坊大・禅覺房大悦者、曾無巡役、

偏依戒壇出衆方大事勤仕之□歎存候、為御興

隆登壇之仕、又一座之役勤仕之□者^{（上）}■□□□□

相当巡役時勤仕歎、将又唐禅院造営□可被積

之歎、此二ヶ条分、為難儀者、可為^{（末カ）}非寺僧旨、依種々

歎申、雖為新儀、又当年之受戒、又□座若輩

出仕モ難治、只唐禅院造営可為興隆、積事又

為先規上者、三人分積当院ノ本坊ノムシヤウヲ

ハルヘキヨシ評定畢、而間七石宛ハ以当和市之足、

積畢、但相觀坊大者被引二人出衆方之歎、

貞和五年六月十三日 集会

三二―六 慈尊院行勤房專円書状

昨日預御札候、折節如御

使存知寄来事候之間、

乍恐不申入御返事候、則只今

自是可令申之由存候处、

重御使殊恐入候、

抑支堂御百性問答事ハ

内々伺申入候之处、不可有子細

由被仰出候之間、年内いかにと

存候へとも、御下期等公私

無隙之間、成明春可加下知候

由、奉行令申候、其子細自是

可申入候を、方々計会事

とも候て、預御催促候、物念

返々恐入候、於御文書者、先

両通を返進之候、明春

重給候て、一途可申沙汰也、

他事期面^{（南北朝期カ）}拝候、恐々謹言、

十二月廿九日 專円

楞伽院御方丈

〔慈尊院^{（奥書）}行勤房返事〕

三二―七 二階堂出羽入道道蘊書状

〔出羽入道状 材木次第之事〕

御返事之趣、委細承

候畢、就其、此御使

数刻遂拝謁、雑談を

申候て、散腹中違

乱候了、比興々々、

恐惶謹言、

(鎌倉末期) (二階堂)
三月九日 道蘊状

三三—— 東大寺衆徒僉議事書案

※四行目行頭の○より、三行目「御忌」の下へ挿入線が伸びて
いる。

東大寺衆徒僉議事書

当寺 勅封蔵者相当

(×闕字)

本願(聖武天皇)感神皇帝四十九日御忌、孝謙天皇并光明皇后以彼

○御遺財(×物)、永所被施入大仏盧舎那仏也、仍代々輒無御自弁

処、近来 後二条院御宇被出王御冠、 後醍醐院御代

被出琵琶一面琴等、曆応者礼服并御冠被出之、每度被借渡

由雖及御沙汰、不被返納之間令失墜畢、彼時分每度本願

御陵鳴動、此併仏陀施入物再不還人財故歟、冥慮尤難

測、而今度可被出御琵琶之由被仰下之条、可為何様哉、

啻匪寺家之衰微、且可為天下重事者哉、以此趣、可被

經御 奏聞之旨可令洩啓(東南院聖珍) 別当宮庁給之由、衆議如斯矣、

延文五年二月十三日 年預五師範曉

三三—— 東大寺衆徒僉議事書写

※三三—— 一 号の写しにつき本文省略
(奥書)
「元禄二年七月廿九日写之、

擬講晋性」

三三—— 法印曉円諷誦文

敬白 請諷誦事

仏法僧御布施

右志趣者、過去幽靈迎第三廻之

忌日、捧一紙之唵所祈得脱也、仰

願幽靈、早驚一磬之響、覺生死之眠、

乘一乘之宝車、遂九品之往詣、乃至有

縁無縁平等利益、所修如件、

応永十年十月廿一日 法印権大僧都曉円敬白

三三—— 紙背 某記録断簡(袋綴)

※原形態ではこちらが表側。

応永十一年正月 日

正月一日公人悉為悦申来間、一丁紙ニツ、ミテ

原紙一帖ノ上ニヲイテ下行之了、

※折筋あり。

補任 大仏殿両界供僧職事

行遍法師 經胤闕
(尊勝院經弁)

右依別当之仰補任如件、

応永十一年五月二日

出世御後見 法印権大僧都判 補任状之間遣了、

使私ナリ

三三—— 四 東大寺八幡宮大般若經誦請定

請定 御祈祷大般若經誦衆事

一番九日十日

弁法印権大僧都「奉」 侍從權律師「奉」 少輔擬講「奉」
 重融大法師「奉」 英真大法師「奉」 英覺大法師「奉」
 澄春大法師「奉」 經俊大法師「奉」 祐海法師「奉」
 良重法師「奉」 賢隆法師「奉」 經寬法師「奉」
 長有法師「奉」 經尊法師「奉」 清尋法師「奉」
 定尊法師「奉」 実俊法師「奉」 春海法師「奉」
 宥憲法師「奉」 澄芸法師「奉」 經忠法師「奉」
 英祐法師「奉」 專順法師「奉」 慶海法師「奉」
 澄延法師「奉」 公定法師「奉」 公弁法師「奉」
 盛尊法師「奉」 賢曉法師「奉」 英弘法師「奉」

二番十一日十二日

大進權律師「奉」 少納言權律師「奉」 賢重大法師「奉」
 盛賢大法師「奉」 經真大法師「奉」 聰海大法師「奉」
 英乘大法師「奉」 英円大法師「奉」 実融法師「奉」
 祐成法師「奉」 澄意法師「奉」 英豪法師「奉」
 盛海法師「奉」 延宮法師「奉」 暁俊法師「奉」
 澄英法師「奉」 祐清法師「奉」 孝能法師「奉」
 亮信法師「奉」 珎賢法師「奉」 覺延法師「奉」
 成重法師「奉」 定秀法師「奉」 嚴海法師「奉」
 秀綱法師「奉」 英嚴法師「奉」 行澄法師「奉」
 順重法師「奉」 公尋法師「奉」 行盛法師「奉」
 大夫權律師「奉」 相模擬講「奉」 經宗大法師「奉」

三番十三日十四日

隆秀大法師「奉」 快春大法師「奉」 延超大法師「奉」
 重譽大法師「奉」 清乘法師「奉」 定祐法師「奉」
 賢憲法師「奉」 賢祐法師「奉」 承俊法師「奉」
 清嚴法師「奉」 正実法師「奉」 隆晏法師「奉」
 定俊法師「奉」 憲春法師「奉」 順実法師「奉」
 盛宗法師「奉」 祐栄法師「奉」 祐真法師「奉」
 清兼法師「奉」 賢慶法師「奉」 專慶法師「奉」
 重宗法師「奉」 順賢法師「奉」 祐延法師「奉」
 公舜法師「奉」 公尊法師「奉」 公經法師「奉」

右守結番次第、有 八幡宮參勤、人別

大般若經二帙宛可有読誦、以已鐘為

刻限、交名字於不參之仁者、學生供下行
 之時、拾疋宛可押之旨、依評定請定如件、

嘉吉三年八月 日 年預五師英乘

三三―五 室町幕府奉行人連署奉書

※室町幕府文書集成奉行人奉書篇下二七七五

三三―六 東大寺八幡宮造営井遷宮日時勘申状（折紙）

八幡宮御造立并

御遷宮勘進事

鉦始

三月十八日卯刻

同申剋上吉日
石居
同廿五日辰剋
上吉日
立柱
同廿六日辰剋
未剋同前二上吉日
上棟
同廿九日日卯剋
巳午剋上吉日
御遷宮
卯月廿五日
亥子之剋上吉
同廿八日亥子之
剋、右同前二上吉日
右日取之趣ニ
御沙汰可被成候、
珍重云々、目出度候、以上、
(江戸中期力)
三月十四日 安井楽三衛門貞 (花押)
進上
三三―七 本僧坊供納所講開請定
(端裏書)
「本僧坊供
慶長十年乙巳二月十五日講問請定 納所淨観」

問題 菩薩所作 勤行 阿弥陀經
二乗直入 錫杖
光明真言七一遍
(羅脱力)
尊勝陀尼三
請定 本僧坊供納所講問衆交名事
大夫法印権大僧都 長乗房律師
講師
了賢房得業 中将得業
卿得業 貞願房得業
長円房阿闍梨 式部卿公
大蔵卿公 浄願房
右来十九日辰鐘定於八幡宮
新造屋辺可有参懃之
状、如件、
慶長十年二月日
三四―一 重源阿弥陀寺誓願記写
※周防阿弥陀寺文書に、別系統の写本あり。鎌倉遺文二九二、
山口県史史料編中世2阿弥陀寺二八と同文につき本文省略。
(内題)
「重源上人誓願之記」
(奥書)
「勅号弥陀仏 建永元六五
夜半入帰寂 定弔偈唱曰
諸葉本不生以無定性故
諸葉本不滅以其不性故」

三四―二 太政官牒写

※鎌倉遺文一四二三三に別案。ほぼ同文により省略。

三四―三 毛利輝元安堵状写

※東大寺文書宝庫文書七六一―二―一の写。大日本古文書東大寺文書之十五第七〇六号の別写。

三四―四 毛利輝元安堵状写

※東大寺文書宝庫文書七六一―一―一―三の写。山口県史東大寺文書四二二と同文につき本文省略。

三四―五 毛利輝元安堵状写

※東大寺文書宝庫文書七六一―一―一―一の写。山口県史東大寺文書四〇四と同文につき本文省略。

三四―六 毛利輝元安堵状写

※東大寺文書宝庫文書七六一―一―一―二の写。山口県史東大寺文書四〇五と同文につき本文省略。

三四―七 毛利秀就安堵状写

※大日本古文書東大寺文書之十五第七一〇号の別写。

三五―一 周防国衙街并牟礼村物成目録勘文

〔端裏書〕
「西国勘状寛永拾癸酉五月日 沙汰所浄光」

防州国衙并牟礼村物成目録之事

合寛永九年分

一、九百三拾七石 御帳面高辻

内

百八拾六石三升

諸給方田畠ニ引之、

残七百五拾石九斗七升

御寺納方田畠共ニ

内

九拾六石六計三升式合六夕 畠方

三石

組頭六人ニ除之、

（紙継目裏印）

拾式石七斗八升式合

永否川成ニ引之、

合百拾式石四斗壹升四合六夕

残六百三拾八石五斗五升五合四夕 田方

右之物成

式百拾三石壹斗八升壹合七夕

内 弘

四石三計

定遣方

百五石式斗

（上司）
去冬上三左衛門尉上乘

仕運上申分

六石

右之運賃ニ弘之、

四斗

上三左衛門上下之飯米

日数四十日分

壹石壹斗

正月十一日御セち入目

但かや八十荷之代壺荷二付而

右之屋祢ふき人夫飯米

但十六人分、去月太仏之

つくろい共ニ

八幡宮棟かわラつゝ、ミ

なをし、其外国庁門之

つくろい人夫六人分

かや百十弐荷之飯米

但是八今度御上使御下向之由二付而

所々御茶屋鏽二高百石二かや拾

荷宛之御触二候へ共、余計からセ如此候、

御国改之御上使御

下向之由二付、道橋其外

百性見苦敷家かき廻り

之取繕人夫百五十人ノ飯米

壺人二七合五夕宛

当春堤普請、其外

井手方人夫飯米下行之、

種米借シ付之分

(紙継目裏印)

御所務方算用ノ時入目

同時酒之代

東村五兵衛扶持方

『未刊古文書釈文作成のための協調作業環境の構築』(2013-2016 年度基盤研究 (A)代表近藤成一) 報告書 2017.2 25~118p

貳石三斗

但七月十三日方酉四月中迄
今度之舟賃

合貳百貳拾五石八斗五升五合七夕

右之内 貳百拾三石壹斗八升壹合七夕申ノ納を以払之、

殘拾貳石六斗七升四合 他借仕払之、

(紙継目裏印)

同村畠銀

一、高九拾六石六斗三升貳合六夕

銀ニノ六百六拾壹匁九分貳厘九毛

内引方

四匁七分九厘五毛

八幡宮太鞍頭屋敷ニ

除之、

貳匁九厘

俊乗房灯明料ニ

除之、

六匁

貴布祢修理免ニ除之

三匁

疫神免ニ除之、

貳匁

八幡宮九月二日御

祭礼ノ時御湯立ニ除之、

合拾七匁八分八厘五毛引之、

殘六百四拾四匁四輪四毛

(紙継目裏印)

内六拾六匁六分七厘

損免ニ引之、

貳拾七匁三分貳厘

入木屋敷ニ除之、

但老間ニ付六分八厘宛、屋敷数
四拾間之分

拾壹匁四分九輪

代官屋敷除之、

合百五匁四分八厘

殘五百三拾八匁五分六厘四毛

内払

百四拾五匁貳分

御判紙之代銀

内拾八匁はた吉壺束貳帖、四拾

八匁ハ八匁カミ六束之代、三拾六匁ハ

三匁カミ拾貳束之代、三拾六匁ハ

貳匁カミ十八束ノ代、七匁貳分ハ

壺匁貳分カミ六束之代

六匁

紙箱之代

六匁五分五厘

国庁ニ有之鎗五本

之さやこしらへ并ニす

(紙継目裏印)

袋之代共ニ

八拾八匁六分九厘

米三石五斗四升七合五夕代

是ハ去夏井出溝人夫四百七拾貳

人之飯米、壺人ニ七合五夕宛、五兵衛

下着以前ニ、但壺度ニ四升ツ、

七拾匁九分三厘

米壺石八斗三升七合

五夕、祢段右同前

是ハ去夏肥後への御上使御通之

拾九匁七分	但式匁かミ式束、壹匁式分かミ五束代 国庁東之門から井敷 之代、但石ニ而きらセ申候、 当春萩御年頭二東 ^(東村) 五兵衛・竹九兵衛兩人罷出候 入目之分、如此ニ御座候、 わらち四拾束之代	六拾五匁	萩方之御用方ニ ^(毛利元俱) 御けミ衆、其外山城殿 御家中折々之音信入目 去夏肥後へ之御上使 御通之時、馬之轡わら ^(紙継目裏印) ち之代ニ渡之
拾九匁七分	之代、但石ニ而きらセ申候、 当春萩御年頭二東 ^(東村) 五兵衛・竹九兵衛兩人罷出候 入目之分、如此ニ御座候、 わらち四拾束之代	五匁九分	御家折々之音信入目 去夏肥後へ之御上使 御通之時、馬之轡わら ^(紙継目裏印) ち之代ニ渡之
式拾三匁式分九厘	五兵衛・竹九兵衛兩人罷出候 入目之分、如此ニ御座候、 わらち四拾束之代	寛永拾年 卯月十六日	東村五兵衛(花押) 竹屋久兵衛(花押) 徳富八郎兵衛 ^(元資) (花押) 上司土佐重統(花押)
式匁八分	是ハ御上使御下向之由ニ付而、高百石ニ ^(紙継目裏印) 五足宛之、御触わらち之手本 從御公儀参候故、山口ニ而誂申候故、如此候、 雨乞之入目度々分 但百性か半分仕候了、其 残り如此候、 施餓鬼之入目	東大寺 御沙汰所法印様	
三拾八匁	是ハ御上使御下向之由ニ付而、高百石ニ ^(紙継目裏印) 五足宛之、御触わらち之手本 從御公儀参候故、山口ニ而誂申候故、如此候、 雨乞之入目度々分 但百性か半分仕候了、其 残り如此候、 施餓鬼之入目	三六――後醍醐天皇綸旨写 ※山口県史一二一別案と同文につき省略。	
式拾七匁	是ハ田ニ虫付申候祈念ニ仕候、給方 御蔵入共ニ、右之分ニ御座候、 太樋之代 右之針かすかいノ代	三六―― ^(封紙ウワ書) 東大寺衆僧等願書写 ^(「謹言上」) 謹言上	
式拾五匁	是ハ田ニ虫付申候祈念ニ仕候、給方 御蔵入共ニ、右之分ニ御座候、 太樋之代 右之針かすかいノ代	一、南都東大寺領周防国佐波郡之内	
五匁五分	是ハ田ニ虫付申候祈念ニ仕候、給方 御蔵入共ニ、右之分ニ御座候、 太樋之代 右之針かすかいノ代		

高千石之所、從天平年中九百年余以來
領知仕來候、故当国主松平長門守殿迄
更以異儀無御座候處、四年以前亥ノ年
之節、長門守殿從家老中預使札候、
紙面者、此中下地遣置候得共、從今年
於大坂藏元、現米百石宛可被下之由
被申越候付而、從此方重々御改申入候得共、
于今承引無御座候、於彼領知者、自往古
守護不入、人夫課役等免許之證文
數通御座候、曾周防之国主自分之
寄附二而者無御座候、則證文等被成

(紙繼目裏印)

御披見、先規之通二被仰付被下候者、
忝奉存候事、

一、右之以知行、毎年二月堂勤行并大仏
八幡宮之仏供燈明相続仕來候處、
加様二成行申候者、恒例之法事等尤可
及断絶候敷、誠寺社之迷惑此条
相究候、被任旧例之明鏡、永代法事等
無断絶様二御裁許奉仰候事、

一、唯今御評定所江訴訟申上候儀、是又
長門守殿江重々相断申候、從前々若
国司違乱之儀有之時者、公儀江致
訴訟、受御下知相濟候、證文明日御座候、

近來者、
權現様御代二も先国主
違乱之儀御座候付、公儀江訴訟申上候處、

(紙繼目裏印)

大久保石見守殿より被仰渡相濟申

證文御座候事、

右之證文等被為及御披見、落着

被仰付候様、奉頼候、已上、

慶安三年七月二日 東大寺衆僧等

安藤右京進殿

松平出雲守殿

三六一三 毛利秀就安堵状写

※大日本古文書東大寺文書之十五第七二三号の別写。

三六一四 東大寺沙汰人中覺書

覺

一、周防国佐波郡之内高千石之所、從往古東大寺領知致來、
右之知行米を以毎年御祈禱・大仏殿八幡宮神供仏供灯明料・

二月堂行法等致相続相勤候、守護不入・人夫課役等免許之
證文古來方數通御座候、当御国主御代々段錢以下諸公事并

守護役・同人夫役・諸天役并城普請已下、任先例、被成御免除
候段、輝元公方以來數通之御判物證文明白有之候、

(徳川家康)
一、權現様御代古例相違之儀有之、訴訟申上、更御下知相濟候、其
後秀就公御代御賄方御逼迫二付、東大寺領知御預り被成、於

(弥右衛門)
大坂蔵元、毎年現米百石御渡可有之旨被仰候ニ付、段々御断申候

得共御承引無之ニ付、公儀江訴訟申上候処、更御下知相済、其以来
回御物成之積、於大坂蔵元、毎年現米三百三拾五石御渡、於御
国元五拾石、候人方江御渡被成候、則秀就公御證文有之候、其
以後御代々領知御預り之御證文有之候、

一、頃年御普請御手伝旁御逼迫ニ付、去々年方御家中并国

中御渡米、寺社惣並御馳走米御引被成候旨、先達而伝

承之候ニ付、去々年龍松院上人を以柄沢五右衛門殿迄、東大寺

領之儀者、外之並与格別之儀、自然惣並被思召候得而者、古例

難立存候旨、内意具ニ申入候、其後何之御沙汰無之候ニ付、定而御

聞届之上、御沙汰無之儀与存候处、去暮ニ至、去々年沙汰落之

由ニ而、去年米之内を以、去々年分御馳走米御引被成候旨被仰

越、不存寄儀難儀之至存候、其節達而及御断申度候得共、月

廻無余日候ニ付、菟角之沙汰難仕候故、先其通ニ而差置候、其節委

細以書中得御意候通御座候、右之通御座候得而者、従古来至

当御代、諸天役等御免除之御證文茂難立、御祈祷料減候

得而者、行法等相続之儀無心元難儀存候、

右之趣、御国元江被仰遣、宜被及御沙汰、東大寺領之

儀者格別之品相立、御引米御除被下候様頼入候、已上、

戊四月五日 東大寺沙汰人中

栗屋喜兵衛殿

右之通、切紙相認遣之、防州国庁寺般若院候人中方江茂
遣之畢、

(包紙ウツ書)
「去暮御馳走ニ西国渡米之内御引ニ付、当年至栗屋喜兵衛方迄以書付
断申遣扣也、其後御聞届之上、引米今年悉相渡、無相違相済畢、

宝永三丙戌年五月廿九日 沙汰所金珠院」

三六―五 佐世元嘉等連署書状(折紙)

以上

(毛利秀就)
藤七郎様御祝言

之儀、来年早々

可被成御調之由候、就

其、御家作之事、

如此被成御書給候

条、右之趣を以、銀

子之儀、一日茂早々

可有御公納之

旨候、恐々謹言、
(慶長十二年)

七月廿一日 佐長 元嘉(花押)

(榎本(中太力) 榎本)

(井原) 元吉(花押)

井上四郎右元以(花押)

防州国衙領

国分寺

三七―一 地頭代沙弥迎蓮・雑掌慶舜和与状案

※鎌倉遺文一九四九八別案。ほぼ同文につき省略。

三七―二 関東下知状案

※鎌倉遺文一九七〇九別案。なお鎌倉遺文の事書部分の「祐縁」を、本文書では「迎蓮」とする。

三七―三 六波羅施行状案

※鎌倉遺文一九九三二の別案。

三七―四 六波羅召文御教書案

※鎌倉遺文二二三九八、岐阜県史茜部荘古文書三一九

三七―五 六波羅召文御教書案

※鎌倉遺文二二八八一、岐阜県史茜部荘古文書三二三

三七―六 六波羅奉行人連署召文書下案

※鎌倉遺文二二九四一、岐阜県史茜部荘古文書三二四

三七―七 六波羅奉行人連署召文書下案

※鎌倉遺文二二九五九。二二九五八は別案、岐阜県史茜部荘古文書三二五

三八―一 美濃大井荘年貢注進状（前欠）

※前欠部は、大日本古文書東大寺文書之十七第八七八号。参考までに左に掲げる。

嘉吉参年癸亥歳石包名御年貢算用状「

（参考大日本古文書東大寺文書之十七第八七八号）

合

御年貢足

貳百伍拾捌貫肆佰参拾壹文内

捌貫肆佰参拾壹文慶「

内「

下用分

参拾伍貫文三十七

談義用途

参貫貳佰柒拾文三十七

御使清助失墜

参拾伍貫文

新袈裟用途

貳貫佰文

御使清里失墜

（以下筒井寛秀氏所蔵文書）

壹貫参佰陸文

麦地子、公方へ沙汰

伍佰貳拾参文

麦地子御使四人草手

貳拾壹貫伍佰肆拾陸文

桑代、公方へ沙汰

伍佰貳拾参文

桑代御使四人草手

貳拾肆貫参佰玖拾伍文

秋畠、公方へ沙汰

伍佰貳拾参文

秋畠御使四人草手

拾捌貫貳佰肆拾伍文

御袈裟絹沙汰

参佰玖拾文

花巖会料御使三人草手

参佰玖拾文

袈裟絹御使三人草手

拾伍貫貳佰捌拾貳文

法華会料沙汰

参佰玖拾文

法花会料御使三人草手

佰参拾文
 佰参拾文
 壹貫佰文
 伍佰文八幡宮
 伍佰文
 貳佰文
 玖拾肆文
 貳佰拾文
 柒佰玖文
 佰柒拾文
 佰柒拾文
 伍佰伍拾参文
 壹貫伍佰文
 貳佰文
 壹貫文
 肆拾文
 佰参拾文
 佰参拾貳文
 壹貫貳佰拾玖文
 壹貫玖佰貳拾伍文
 貳佰柒拾陸文

政所方草手
 定使草手
 五月朔日講法際寺
 八月朔日講
 方々寄子米代
 (杭瀬)
 くいせ川の舟こし
 国吉符下会料
 高橋郷色濟、清里方へ
 恒吉麦本
 正任麦本
 菊成麦本
 金守麦本
 法花会料、公珎符下沙汰
 楽田郷色濟
 (用途)
 ヤフサメヨウトウ
 アケ馬一キ
 同四ノ馬一キ
 (細男)
 セイナウ
 法花会料未進御使ニ清助下向之時
 くほた殿御名内麦地子
 桑代
 秋畠
 袈裟絹
 会料

玖佰柒文
 肆拾文
 貳佰玖文
 壹貫伍佰文
 壹貫肆佰肆拾文
 佰参拾文
 已上佰柒拾肆貫伍佰肆拾陸文
 御寺納
 公方・其外方々色濟分ニ沙汰
 拾貫文
 十二月十八日運上
 嘉吉参年癸亥歲十二月日
 下司代藤原氏信(大垣)(花押)
 三九—— 大部莊公文尼性阿陳狀(前欠)
 ※大日本古文書東大寺文書之一九第一二二七号は前欠部を含め
 翻刻。鎌倉遺文二八三六九、兵庫県史大部莊一一二、小野市
 史三四二
 四〇—— 東大寺学侶連署神水記録
 ※富山県史中世六三一
 四一—— 明法博士三善信貞等勘申状

- ※平安遺文一九九八、三重県史玉瀧荘六九
- 四二―一 黒田新庄莊司作田畠注進状
- ※平安遺文二三〇三、三重県史黒田荘二四三
- 四三―一 官宣旨案
- ※三重県史黒田荘八九
- 四三―二 東大寺三綱大法師陳状
- ※鎌倉遺文六七四、三重県史黒田荘四八〇
- 四三―三 紀光真愁状案
- ※三重県史玉瀧荘三四五、鎌倉遺文未収、大日本古文書東大寺文書之十第一七九号参照。
- 四三―四 黒田庄住人星河九郎申状
- ※三重県史黒田荘一二五一
- 四三―五 大井莊引出物用途分田注文
〔端裏書〕
「御引出物注文、ひつしのとし」
- 貞治六丁未才御引出物用途分田注文
合
- 一、本名参町 代三貫七百五十文
- 一、名々分
- 平松 七段 小藤太 二段半
此内一段御供田在之、
- 今平 一段嘉暦ヨリ 助永一段以往ヨリ、但嘉暦之比
二段 行阿ユツリ
已上 三段
- 大工 二段少以往ヨリ福光二段以往ヨリ
二段半行阿之ユツリ
一段 藤井殿ヨリ
已上五段半
- 恒吉 四段藤井殿ヨリ 則清一段西円後家ヨリ
一段少西円後家ヨリ
已上五段少
- 并二町七段大
代三貫四百五十八文
- 都合柒貫貳佰捌文
- 御所務（聖珍）東南院殿御いつきのはう返抄の時、
預所安（寛胤）殿院侍従公、定者正真彦三郎入道
御寺務（義宝）勸修寺殿代普門院殿
- 四三―六 美濃大井莊沙汰人等月宛用途請文
- ※三重県史その他一二九
- 四四―一 東大寺三綱等連署陳状案（土代）（前欠）

※三重県史黒田荘五二一、鎌倉遺文未収。前欠部分は、大日本
古文書東大寺文書之十一第二一七号（三）。

四四——紙背一 笠置寺住僧等書状

当山住僧幸心去月十五日夜、於
住房被殺害了、伴僧存生之時、以武
勇為先、好鼻惡為業、都非僧徒之行、
即集近国不当之輩、為其伴類之間、

（この間に四四——紙背二あり。）

度々及衆儀故、朝曾任衆議之状、雖
致禁制、一切不用其教訓、大略令離房
了、即移住別房之間、更不知誰人所
而夜中被殺害了、而当山依為未曾
有之狼藉、随分雖致沙汰、無指檢議
候、但□□処□之敵人、和束杣内在之

（料紙裁断により中欠）

件使庁出濫訴之由有其聞、事若実者
非只為一兩之不祥、定及一山破滅之躰歟、仍
早令触申興福寺別当僧正御房給、被
止彼等之惡行、且又以本寺御使令尋申
非違別当前、尤可宜候歟、朝曾既自生
年三歳撫育伴僧了、為止惡行、一旦雖
加勘責、芳意未忘乎、仍被殺害之後、
且止寺家之出仕、愁歎無極之处、彼縁坐

等指證拋申、付無実之条、付惣別、返々
不便次第候歟、早以此旨可令執申

（政所給候、恐惶謹言、
正治二年頃）
八月 日 笠置寺住僧等
進上 年預五師御房

四四——紙背二 某書状断簡（前欠）

※裁断による前欠

候也、恐惶謹言、
（正治二年頃）
五月四日

××

四四——紙背三 かな消息断簡（前後欠）

※裁断による前後欠。段内部の改行は／にて記す。

□

するとして／これを

これへ／廿一日わたり／おはし／ますへく／とて候か

たつうとの／さうやく／ふ二

まからんとし候／□に／この

四四——紙背四 文書断簡

※裁断による前後欠。右端に文字残画七字分のみあり。

四四——紙背五 某書状

覚芸得業御訪物、如召候

給預候了、早可送

遣候也、不可過之候歟、

雜紙同返給候了、

當時者これにて候なん

残者他物候、漸々便宜

時可申候也、恐々謹言、

(正治二年頃)
乃刻 □□

四四——紙背六 某書状

※三重県史黒田莊四三九

四四——紙背七 右中弁長房書状

雀百十悦給了、折

(節為悦候、恐々謹言、
(正治二年頃)
四月十七日 右中弁長房

四四——記録所勘状案(後欠)

※三重県史黒田莊五二四。後欠部分は大日本古文書東大寺文書
之十一第二一七号(四)。

四四——紙背一 沙弥能蓮書状

御札之旨畏以承候了、

実其後雖可令言上事候、

速々忝劇無隙候之間、乍

思于今罷過候之处、遮蒙

仰候之条、返々畏悦思御

候、御在京之時、必企参上、

委細可令言上候者也、

抑五色六古畏以拝領

仕候、御志之至、不可申

尽思給候、能蓮恐々謹言、
(正治二年頃)
七月十日 沙弥能蓮奉

四四——紙背二 皇太后宮大夫藤原成経書状

瓜十合返々悦給候了、

御忿々之中、無御忘脚

沙汰給候之条、返々本意

不可申尽候、随分経営御

察候者也、每事期後信候、

(恐々謹言、
(正治二年頃)
六月廿九日 皇太后宮大夫成経

四四——紙背三 貞円書状

指事不候之間、久不参上

候之处、畏以存候畢、

聊使事、若人の僻事令申

候歟、如當時者、此辺無殊

事候也、每事企参上、可申

上候、恐惶謹言、
(正治二年頃)
七月五日 貞円

四五―一 某札紙書
(端裏書)
興福寺供養三百經事
「宣旨」

正応四年
僧名事、各就領状
綱所可致覆催候之間、
忝可被注申候乎、

退言上、
經尊為御使、去夜俄
下向候也、今間承定夕
方明今之間、可上洛候、且又
可参申入候之处、為御使、参兩
院家候、定無其隙候云々、重
誠恐謹言、

四五―二 光嚴上皇院宣
東大寺常燈・常
香消滅御祈最勝
十講并百座大威德
法、自来十四日可始
行之由、可有御下知
寺家之旨、

院御氣色所候也、以此旨
(東南院聖珍)
可令申入別当宮給、
仍執達如件、

貞和四八月五日 左大弁宗重
(中御門)
謹上 大納言僧都御房

四五―三 後村上天皇綸旨案
(端裏書)
「はうくわんにうたうゑのあんもん」

ヨシアキラシムタヒノコト シキリニカウムルチヨクメン タマハテ□□リムシヲ
義詮進退事、頻蒙二 勅免一、給二 綸旨一之
(足利)

ヨシシセウトウンノ イカウフシチナリ ナヲヨシホウシマウシイレ クヒセムヒラ
由自称云々、一向不実也、直義法師申入、悔二先非一
(足利)

スナハチモテイヘム 「トカラストヲイカテカラルキヨウ カレラカ
即以違変前車轍不二遠一、争被三許二容彼等
(コカ)

虚誕一哉、所□故無二其儀一、可四令三追二討尊氏
(足利)

フシ ナヲヨシホウシラフ シタカテコウニ ヘシセラルチウシヤウ ヨシ
父子・直義法師等一、随二功一、可三被二抽賞一之由、
セムノ ラレヲウセヲワンヌテイレハ テムキカクコトシコトノ クモテスシヤウヲ

先々被仰畢者、 天氣如斯、悉之、以二状一、
(日野邦光カ)
正平六年八月二日 左兵衛督
(道譽)
佐々木佐渡大夫判官入道

四五―四 後村上天皇綸旨案

ナヲヨシノアソムクイテセヒヲ キスル

□左馬頭直義朝臣悔^(二) 先非^(一)、帰^(二)

「ニ ヨシセウシマウスアヒタルクタ チヨクメンノリムフシ トコロニ

□化^(一)之由称申之間、被^(三)下^(二) 勅免綸綍之處、

「タチマチニヘムシチセムケムヲタテマツルカスメチウケムヲフシムノイタリハナハタナニコトカ

□□先言^(一)、奉^(三)掠^(二) 朝憲^(一)、不信之至、甚何事

「コレニハタシテカウムテムノセメヲホツラクホコクニトウム」シヨハウノクワンクム

□□^(三) 果蒙^(二) 天譴^(一)、没^(二)落北国^(一)云々、諸方官軍

ステニアクキヘイヲタカウチヨシアキララウシナウソノセイヲシフム

已^(二)籤^(二)義旗^(一)、尊氏・義詮等失^(二)其勢^(一)之時分、

「コトシタウ」 「ヨル □□ユルニスキテコノトキヲコセンイツレノヒマムサム

□欲五顛之□□^(二)由^(二)壁^(一)、過^(二)此時^(一)、期^(二)何日^(一)、満山

ハケマシテシユリキヲ」 「ヤウ□□クハヤクハンカウシテキヤウトニスヘシキヤヲ

励^(二) 衆力^(一)、器^(一) 「策^(一)、早發^(二)向京都^(一)、可傾

「キヤウクツヲ□□カ子では又シクラウノトモカライチトウ□□スヘシモハラニ セイ

覆案^(二)窟由、兼又宿老輩一同可^(二)專精

セイヲテイレハ

誠者、

「ムキコトシカクノコト」ク モテシヤウヲ

天氣如^(二)斯^(一)、悉以之、以状、

正平六年八月七日 (吉田守房)
左中弁判

延暦寺三千衆徒中

四六—— 観世音寺所司等解

※平安遺文補三一九

四七—— 観世音寺公験案文目録

※平安遺文補二九九

四八—— 法華堂僧供米請取状(切紙)

※全面を朱横線で抹消。

(紙継目裏花押)

謹請申法花堂僧供米事

合式拾玖斛者

右、件僧供米、依例所請申如件、

長治元年五月廿九日 堂達良任

堂達長命

(紙継目裏花押)

四八—— 尼覚阿田地売券

(裏書) 大仏殿奉寄

(端裏書) 四□□イ

西京人

シリエタ

沽却 田地事

合式段者 南端也、字尻江田
甲斐庄之内

四至条里坪付等在本券面

右件田地者、尼覚阿弥陀仏之相伝所領也、

而依有要用、限能米拾陸斛甲斐庄斗定

相副本券、永沽却藤原姉子畢、更不可
有他妨、仍為後代證驗、放新券文之狀
如件、

建仁二年四月廿八日

領主はんす（裏に拇印四顆あり。）

枉依被乞請与判

大法師（花押）

四八―三 景時孫三郎田地売券
（端裏書）
「□□□□□□□□」

（紙継目裏花押）

売渡 水田立券文事

合式段者字榎灰

在大和国添上郡左京五条二坊一坪之内
自道西エ二反三反目
合二反也

四至 限東他領中垣 限南中垣
西限類地際目 限北大道

右件田者、景時孫三郎先祖相伝之私領也、雖知行良
年久敢無他妨、而今依有要用、限直錢参拾貳貫
文、永代所奉売渡平実殿仁実正也、向後更不可有
他違乱、但於本券文者、有類地之間、不能副進、則毀
其面乎、仍為後日證驗、放新券文之狀如件、

承久三年辛巳十二月六日

売人景時（略押）

嫡 乙女（略押）

鶴石丸（略押）

四八―四 東大寺大湯屋湯田充行狀

※三重県史黒田莊六六六

四八―五 阿闍梨定延房舎敷地等讓狀

讓与

房舎同敷地田地并資材等事

敷地壹处在東大寺知足院四足北脇

東西口十三間此間東七間知足院領 西六間別領

限南大道 限北覚円房地際目

水田壹段在大和国鳥見庄内

所当米玖斗柒升十一合器定、此内参斗本供斗定

任覚善房之寄進、毎年可進二月堂也、則六十步

文書進二月堂了、

持仏堂壹宇在仏菩薩像并仏具等

房壹宇二間三面

雜舎壹宇二間三面

（紙継目裏花押）

平門壹宇

資材等載別紙（この行にかけて裏書あり。）

荒野壹处在知足院東辺、円行房跡并南谷

限東大道 限西堀

限南他領高岸 限北大道

右敷地・水田・房舎・資材等者、定延永代所

領掌也、門弟等雖有其數、無可扶持進退

仁、爰良秀大進五師且依為年來相憑之嫡弟、

且就為淨行器量之躰、悉限來際、所讓与也、

其身若有墮落之儀者、可改讓之、又五師

一期之後、以淨行之仁可讓付之、此地依為淨行之

砌、所成此契狀也、但若於有不孝

向背之事者、可思改之、門弟等之

中、違背此讓狀、於致押妨之輩者、

為其身還可為罪科、更不可叙用之、

（紙繼目裏花押）

仍為後日之龜鏡、具勒子細、永

讓与之狀如件、

建治元年十二月五日

（異筆）阿闍梨大法師定延（花押）

「依為時之沙汰人、為向後之

明鏡、可記錄之由、依本人

所望、殊染筆了者

年預五師親尊（花押）

（裏書）「此內於円行房之跡分北荒野者、沽却石聖輕重房

了、

於南谷者、内院領惣門之南脇□ニ

限永代相博了、

弘安十年八月卅日」

四八―六 大仏殿燈油料米充行狀

※鎌倉遺文一九三二三

四八―七 春日丸等敷地売券

沽却 敷地事

（紙繼目裏花押）

合口三間者四至在本券文

在左京二条七坊六坪東辺北御門小路西辺

右件敷地者、春日丸買得相伝之敷地也、而

今依有要用、限直錢伍貫文、相副本券文等、

永奉沽却信景事实也、向後更不可有他

妨、万一若有称買得相伝之主、若者称取質物

等之違乱之時者、可奉返弁本直錢、更々不可申

子細、仍為後日證文、放新券文之狀如件、

建武元年甲戌六月廿六日 売人春日丸（花押）

鬼石丸（花押）

（紙繼目裏花押）

四八―八 東大寺惣寺利錢借請狀

（端裏書）「六貫文惣寺ヨリ之借出者也、河上自名、

建武四年六月四日

（紙繼目裏花押）

借請 利錢事

合陸貫文者 以河上庄播磨得業納明年

年貢可被引替者也

右件錢毎月百文別加四文之利分、可令返弁、質物

者、兵庫関月宛用途以最前納分可致其沙汰、若

〔此足力〕
□□令相違者、以茜部庄并河上庄年貢、可令弁償、

河上庄年貢事、為納所更不可有疑、以自名□□
〔兵庫力〕

立用者也、但明年々貢内也、今此用途□□□□

関并茜部庄等条々寺訴申沙汰之間、使節三人
藏人法橋 順禪房五師 伊与得業在京之間為糧物可借用之間、

□衆議借書狀如件、

建武四年丁丑六月四日 年預五師円真（花押）

権大僧都懷紹（花押）大法師順兼（花押）弘実（花押）懷舜（花押）

権律師覺聖（花押）大法師頼昭（花押）大法師定賢（花押）

権律師賢俊（花押）大法師顕寛（花押）

執行上座法橋朝増（花押）

擬講円範（花押）

（紙継目裏花押）

※表全面を×で抹消

〔裏書〕
□内、本錢参貫五百五十文、加利分出之畢、

残本錢貳貫四百五十在之、

康永四年八月十二日 年預五師顕寛（花押）

〔此内本一貫五百文、利分一貫五百文 合三貫〕

自名庫出下知之了、残本錢九百五十文

貞和四年五月廿九日 年預五師代円英（花押）

〔此内本六百五十文利分六百五十文、合一貫三百文、以之

播磨得業名之内出之了、

貞和五年六月七日 年預五師頼紹（花押）

「 応元年五月廿五日 去年三斗八升

年預代□□（花押）

□□□之時催□□了、

四八―九 河上庄三斗米請取狀

請取 河上庄三斗米事

合参斗者

右且所執行得分請取之狀如件、

康永貳年九月廿八日 朝増（花押）

四八―一〇 僧円念孝息院敷地売券

〔端裏書〕
「ハシタノハタケノチシ、五斗升ナラミサ□ 百性中御門 蓮阿ミ」

沽却 孝息院敷地事

合口陸間者 四至在本券面

右件之敷地者、親父一念房之手ヨリ譲得後、
多年知行之間、敢無他妨、而依有要用、限直

錢伍貫文、相副本券文等、永代奉沽却楞伽

院之坊主御房事实正也、但親父之讓狀

者為連券之間、毀其面、早向後更不可有他

妨、若万一違乱出来之時者、本直錢可奉返

弁者也、仍後日放新券文之狀如件、

貞治四年乙巳九月廿六日 売主円念（花押）

忍性（花押）

四八——大仏燈油田打渡状（横切紙）

祝蘭庄内

大仏燈油田事

田老反、同畠老反

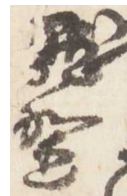
東大寺御料有之、

打渡申候也、仍

状如件、

応永元年十月廿五日 季盛（花押）

龍[×]



四九——年預代行遍文書勘渡状

※三重県史黒田荘一三五一

五〇——年預五師光重文書勘渡状（中欠）

※中欠部分の一部は、大和文華館双柏文庫所蔵文書に接続する。
（端裏書）
勘渡帳 正長二年 年預五師光重

勘定 自応永卅五年二月廿五日至正長二年

二月廿五日勘渡帳

一段

一、河上庄三斗米年々引付雙紙老帖

一、同庄年々結解状九通

二段

一、受戒会日記雙紙式帖、巻物参通

一、高瀬庄御供社家目安老通

一、諸会樂所式目一通

一、野田庄記六、一通

一、上司北倉目六、一通

一、神輿造替日記新古二卷

一、五師所記六四通

一、諸供料入実記六五通

一、勅封藏衆徒事書一通

一、輪転記六并祈雨觀賞記六、合二通

一、法花会結解状六通

一、装束記六一通

一、大鼓張綵色下行物日記一通

一、罪科人年預得分状一通

一、就五師得分事、下司請文一通

三段

一、手搔会郷頭人神人起請二通

一、唐笠春藤起請文一通

一、間方記六一通

一、六堂大仏殿掃除記六、一通

一、上笠間与帶刀相論記六、一通

一、手搔会日記等二十一通

一、棕橋庄記六、二通

一、東寺本末記六、一通

（中欠）

- 一、大部庄并美濃庄記六、七通
- 一、大部庄記六一通并年貢損免否認記六、一通
- 一、大部庄成清・友清請文案一通宛文案一通、清方請文案一通於正文者学侶方唐櫃預之畢
- 一、切畑関方記六并起請二通
- 一、他寺方衆於当寺郷放使時起請文一通
- 七段
- 一、法花会料請文起請等数通
- 一、御帰座日記二卷
- 一、郷内有徳銭壺銭等記六・起請等二十通加折紙定
- 一、勸修寺殿修正頭役状六通
- 八段
- 一、大井庄堤免除院宣案一通
- 一、八幡宮御供并御燈記六、二通
- 一、湯結解状十九通
- 一、東金堂本尊鑄勸進牒状并木引人夫牒状
- 二通、折紙一通
- 一、惣寺借物往来一通
- （一）八幡宮御遷宮院宣三通
- （中欠）
- （以下双柏文庫所蔵文書一三七・一三八）
- 一、阿波庄最勝講東南院殿事書式通
- 一、大部庄・榎野庄両庄出状老通

- 一、後河大嘗会米状老通
- 一、油倉結解書抜数通
- 一、成田両人起請案老通
- 十二段
- 一、大仏殿諸請定数通
- 一、解除会并仁王講請定数通
- 一、八幡宮諸請定数通
- 一、龍池諸請定数通
- 一、執金剛神諸請定数通
- 一、幸芸大般若請定数通
- 十三段
- 一、二倉文書之借書并注文、合参通
- 一、室町殿御下向段銭等新古日記双紙式帖
- 一、高瀬方御供日記一帖
- 一、大仏々性勸進草□□
- 一、集会肝要日記一帖
- 十四段
- 一、大部庄公文名并恒清名御教書案三通、但紙ハ二枚
- 一、楽田御帰座用途、野田庄契約状案文、公文他
- 郷居住制戒、合五通
- 一、料絹山賊時、地下弁之状式通
- 一、官庁段銭京都事書・他寺事書、合式通
- 一、河上田数注文等四通
- 一、僧綱・已講集会三度一度免除記六、老通

一、付小綱事、賢成・賢真之起請式通	五一―一	東大寺領押領所々事書案（前後欠）
一、大仏殿骨籠事禁制、六堂等起請并請文、合二通	※三重県史黒田莊八三四、第五一卷全点は遠藤基郎「筒井寛秀氏所蔵文書所収の弘安德政関連文書」（『南都仏教七六、一九九九年』にて翻刻。	
一、河上井手事、付二条法眼状壺通		
一、高座等被塗立時、澄祐起請并結解折紙壺通		
一、他寺方々号所并関方沙汰之記六、壺通	五一―二	東大寺封戸・転倒莊園・当知行莊園・転倒諸末寺等注進状案（前欠）
一、自手搔大夫、公方出関文書四通	※三重県史黒田莊八三二	
一、上下頭公人与神人相論起請文壺通		
一、受戒会第三日闕如之時、他寺堂出状并他寺		
（中欠）		
（以下筒井寛秀氏所蔵文書）		
一、大仏殿燈油之聖二人油倉寄宿、油倉仁遣状案文一通	五一―二―紙背一	某書状断簡
一、兵庫嶋修理算用状并財木注文并余処財木預状、同修理成清・清晴起請文合四通	五一―二―紙背二	某書状懸紙
一、蒲御厨二松辞退状一通	※切封墨引のみ	
一、賢聖坊関辞退状一通	五一―二―紙背三	順口書状
一、嶋々訴詔目安一通	五一―二―紙背四	某書状
一、嶋修理結解状一通并清晴起請文一通		
一、付徳政事、他寺方学侶衆徒牒状合二十五通并徳政式目一通并起請二通、折紙三枚	五一―二―紙背五	散位土師基安申状（折紙）
一、大仏殿燈油結解交名、料絹結解交名、関結解交名三枚	五一―二―紙背六	周防国宇佐木保地頭沙弥蓮信申状（折紙）
正長二年己酉二月廿五日	年預五師光重	

- 五一―二―紙背七 順口書状
- 五一―二―紙背八 某書状礼紙書（本紙欠）
- 五一―二―紙背九 某書状封紙（本紙欠）
- 五一―二―紙背一〇 某書状（後欠）
- 五一―二―紙背一一 称念書状（折紙）
- 五一―二―紙背一二 某書状（折紙）
- 五一―二―紙背一三 某書状
- 五一―二―紙背一四 某書状（折紙）
- 五一―二―紙背一五 叡尊書状
- 五二―一― 僧明源申状
- 所遣下之塩給了、抑
- 御葉垣手之由、就便人、又
- 々可遣仰、又半大切く、
- 北中門未令葺、同南面不

- 取始候、此非他事、依納
- 半不候也、猶々相構今
- （~~（×来）~~明候之間、可遣下、可令造瓦候も、
- （~~（×食物）~~依食物不候懈怠、
- 定後勘当候敷、見代
- 物、件事等料随候、
- 可遣下、又大殿曼陀
- 羅奉懸料綱大切候、
- 如此夏程例、奉懸を
- 依古綱切損、遅々者、若苧
- 出来候、七八十斤許、乃至
- 布候、二三端許、同可遣
- 下者也、以如此趣、一々
- 可令言上給状、如件、
- （~~（康平二年頃）~~五月六日 僧明源
- 五二―二― 東大寺大仏湿潤解文案
- （~~（端裏書）~~※大日本古文書東大寺文書之二第四三九号と同内容。
- 「天喜四」
- 「湿給寺解文并御祈宣旨案等」
- 東大寺
- 言上大仏湿給事
- 右、以六月廿四日堂司等為備例供開堂之处、大仏
- 挙體湿満給者、即所司大衆共参堂奉拝見、已

有其実、仍謹注其旨、言上如件、

天喜四年七月二日 都維那伝燈法師位

寺主伝燈大法師位

權上座伝燈大法師位

上座威儀師伝燈大法師位

別当権大僧都法眼和尚位

五二―三 大和国目代中原刑部録貞兼書状

〔端裏書〕
「貞包下向南都之由九月廿六日」

如此申候間に、宿所許

は給て候也、何事も

見参にて申承候へく候、

雖不思懸候事、為大式殿

御使、令参浄乘院律師御房

候之處、春日御参籠之間、宿所

尋煩候也、何様にか可仕候、就中

馬五六疋候、簡遊大事候、雖

少々可申給候へ、恐々謹言、

〔平治元年〕
九月廿六日 刑部録貞包

謹上 威儀師御房

五二―四 僧寛信奉書

〔端裏書〕
「春日季頭絹借書承安三年

為
御寺進上美絹物

寛信奉」

於此絹者弁了

美絹四丈今被進上候了、

今度如此令尋進給、実

以外之御宮仕候歟、返々

悦思食之由、御気色

候也、恐々謹言、

〔異筆〕
乃刻 寛信奉

〔承安三年九月 日〕

五二―五 高階泰經書状

〔大〕
東太寺事、為結縁

随分可抽愚忠之由

令存候、然而被止 奏事、

于今不快候、以人令申

候はん由強候歟、加之、自

明日今熊野御精進

之由聞候、弥不可御候歟、

仍被進上候也、

近業沙汰不便候者也、

〔寿永元・二年〕
十一月五日 泰經



五二―六 清貞書状

かしこまで申上候、おほせかう

〔用途〕
ふり候、御ちうしんの御ようとう

の御事ハ、きやうにてすくなくし
ハしとの^(殿)へ、御□た候はんハ、よく
候へく候、そのミうちにてへん^(弁)
のとのと御たつね候て、たしか
に御さした候は□□く候へく候、かミ
ようとうと申候御事ハ、さた
申^(計)たる御事とハ候へとも、御
ハからい候て、御さした候は、のちの
ためによく候へく候、もし又くしハ
しとのくたりなんとハし候は、よく
御たつね候へく候、

一、しまの御事すて御事ゆき
候、御こゝろ^(心)やすくおほしめさ
れ候へく候、このよし御まうし
候へく候なれと、かしこまで申
上候、
壬^(室町前・中期?)六月廿□日 清貞上(花押)
かうけんの御はう申させ給へ

五二―七 僧聖爾書状
「^(端裏書)新院本連房返状 弘安四年」
猶々今夕御文を
可給候、
御札之旨委細承候了、抑

上人ハ今朝八幡へ上了、
便宜之事、明曉、即御文
を給り候者、慥可遣候、
関東上人ハ不存知候、先同
道ハ不候也、兼又憑被
思食候之由、蒙仰候、殊以承悦
無極、
候へとも、真実ニ自他無内外
可申承敷、恐々謹言、
八月十八日 聖爾

五二―八 僧寛成書状
「^(端裏書)近江国清水庄□□請文正応二十月日」
今月廿八日、一条法印御坊清水庄
事、被下 裁許院宣候畢、御使
馬^(主力)□一騎、歩定十余人入部之間、
庄官等可拝見 院宣之由令申候
処、不及見候、何様次第候哉之由、
去夜自庄家以飛脚令申候、以外次
第候、御沙汰之趣可為何様候哉、
趣、可有御披露候、恐々謹言、
九月廿九日 寛成

五二―九 永仁六年東大寺学生供記録案

「永仁六年学生供沙汰用途記録」
(端裏書)

記録 去永仁六年学生供沙汰用途事
右此沙汰者、永仁六年之年貢、寄事
於異損、致未済之間、及学侶之烈訴之
上者、不論死亡等之跡、彼年之年貢
寺納之時、於納所之辺抑其足、可令
返納借物、仍為後日沙汰、所記如件、

正安二年五月九日

若去々年之年貢空手者
以当年之供料、可令返納借
物也、仍守記録如件、

五二——一〇 法印玄済請文

(東)

□大寺申仏聖田少東庄行康間事、
院宣并長者宣之趣、謹奉候了、奉祝
神○木事、無其儀候也、且先年之比、押小路

殿御檢録之時、被経種々御沙汰、任
玄済相伝、預御成敗候之處、行康抑
留金剛勝院本家役、随而、不叙用
領主下知、致悪行狼籍候之間、被下
院宣・長者宣於武家、于今雖被下
数ヶ度召文、不相随、剩奉祝神木
由、掠申候之条、重畳悪行狼藉
候歟、以此趣、可有御披露候、恐々

謹言、

(応長元年)
九月十二日 法印玄済

五二——一一 龍池仁王講講師問者請定

(端裏書)
「瀧池祈雨仁王講々問参着事」

奉唱

瀧池仁王講々師・問者事

初日十一日

講師 英海法師「奉」

初問懷舜法師「奉」
二問俊尊法師「奉」
三問円慶法師「奉」

第二日十二日

講師 慶英法師「奉」

初問宗忠法師「奉」
二問源覚法師「奉」
三問審円法師「奉」

第三日十三日

講師成真法師「奉」

初問玄海法師「奉」
二問俊覚法師「奉」
三問実円法師「奉」

右依衆議奉唱如件、

元亨元年七月 日 年預五師慶顯

五二——一二 僧円春書状

(播磨) (已講)
はりまのいかうの御房御口入

ニて候はん也、かやうの御事
こひねうハ候ましく候也、

一日善得法師のほり候はん時、此御ふミを
まいらせ上て、上へ内々申させおわし

まし候へきよし、なけき申上て候、

はん事、いかやうニ候へきやらん、

あいにかまひて、よきやうニ申上て

給候ハ、返々よろこひ入候へく候、

とニもかうニも御返事をうけ給

候へく候、いくたひもせんねんのころ、

執行職二つけ候はん米を十石〇乗勝院殿大師講

米ニかりめされて候おりふし、かやう

のおりニて候へハ、なけき申候よしを申候

と、このおもふきにて上院へハ下候ハ、

別子細ハ御わたり候ハすかと存候、

秋之時ハいそき候、馬殿宿所へのほせ候へく候、

かまひて、このおもふきを取申

させ給いて、御返事をとくくうけ

候へく候、同ハ馬殿下され候へきよし

うけ給候、かやうの事をも、御ふみてハ

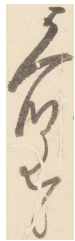
くハしき事もきこへ候ハてハ、御下も

候へかしと存候、く、

申候へく候、

(鎌倉末期)
五月十二日

円春 (花押)



越中殿
(切封ウハ書) 封

越中殿御宿所 円春

五二―一三 与田保預所書状案

「端裏書」
「サイシヤウハウ、メス状」

関東六波羅殿御教書如此候、

忿々有上洛、可有申沙汰候也、

巨細于見状候歟、恐々

謹言、

(鎌倉後期)
七月十日

与田預所
宰相公御房

五三―一 在京使者某書状

※大日本史料六編一二冊貞和五年九月六日条参照。

十四日御札同夕到来候、委細承候了、

抑十三日武家御沙汰之趣、好専・源忠を

被召上候也、昨日十四日申候了、定参着候

歟、重夜打・放火事、今朝事書を

付雜賀候了、念可令披露之由雖領掌候、

猶早速被触將軍家之御所候之様ニと存

候て参將軍御所候て、須賀壱岐守ニ

対面申て、具語申候き、如今者大殿之恐怖

不可廻時日之由申て候へハ、如法く驚入候て、

やかて可申入候とて参候しか、無程罷出候て

申候ハ、被驚思食候、即被副御使候、有

同道可触申執事とて、内鹿嶋五郎

左衛門尉と申候物を被副候之間、同

道候て、罷歸^(高師直)執事許候へハ、將軍家御使事様

申候て後、輒波大進房を被出候て申候ハ、

雜賀入道出仕之後可有沙汰候、忝出仕候之

様、為寺家使者被催促候へと申候之間、以

公人丸申遣て、待入之處、又大進房出候て

申候ハ、雜賀ハ只今ハ不可出仕事候へハ、我身も

先可退出と申候之間、何ニか様の重事、急

事をハのひく被思^(食)候やらんと種々ニ申候し

かとも、さ候とてハ、雜賀不出仕者、不可叶候とて

大進房ハ罷出候了、其後公人丸馳歸候て

申候ハ、雜賀許ニハやかて可参とハ申候へとも、佐

渡判官^(佐々木導管)入道・栗飯原^(清胤)已下物共会遊候、

只今風呂焼始て可入なと候、只今可

参之躰も候ハすと申候、大進房も此事を

兼て存知仕て、只今不可参候由申候けると

覚候、何様雜賀も輒波も懇ニ有職者

立て、さまでもなき事を例の事々しく

申を存て、忝あはてゝも出仕披露も候ぬと

覚候、返々不可思議候く、但將軍ハ如此如法

被驚仰候へハ憑敷候、執事も外ニハ驚たる

気色ハ不見候へとも、内々ハ驚候なる、両門

跡使者不上洛者、又武家使者を可下候敷、

誰にてかあるへきなどの沙汰にて候と、内々

承候へハ悦入候、好専等可上洛左右も御沙汰之

趣も承候ハんとて、昨日入夜候まで、雜賀を

尋候へとも不謁候、今朝又同前候、猶方々へ

罷向て可承候由存も、其左右承候者、忝々

可申候、所詮^(足利義詮)関東御上洛以前ニ一途沙汰

候へきよし、執事辺も内々沙汰候と承候へハ

待入候、

昨日、日野^(資明)大納言之亭へ罷向候、我身ハ

風氣^(成藤)とて、以青侍被語候ハ、今日自武家

以二階堂安芸守経 奏聞候、 勅答ハ

○先度既被仰武家候ぬる上ハ、為武家こそ沙汰

候ハんめと被仰出候、なれハ為寺家使者も

武家を猶々被催促候へと被申候、武家 奏

聞之趣をハ不被語候、推候ニ不触武家嚴

制候、此上ハ可為何様候哉之由にてこそ

候つらめ、為武家たにも不沙汰伏候を、

為 公家ハ何ニと可及御沙汰候哉とこそ

日野青侍も申候しか、何様武家

も外ニハいと不驚之躰ニ候へとも

内々ハいかゝと云事にて 奏聞な

とも候けに候、関東上洛以前ニ、就

善悪一途ハ可出来候歟、待入候也、
雖無分明之左右候、無御心本候はんと
存候て先申候、恐々謹言、

(貞和五年)
十月十五日巳刻 在京使者
年預五師御房

五三―二 年預五師某書状案

〔端裏書〕
「遣大勸進上人状案、建武二七廿四」

自去廿日至昨日廿三日、連日合戦之次第、毎日

昼夜朝暮勤事也、雖經 奏聞、于今曾

不及驚御沙汰候之間、今朝又欲寄来候、仍忿為經

奏聞、雖付此状於長官候、定不及急速沙汰候歟、

(×進)案文進覽之、得其御意、早速被經

御 奏聞者、可為本望之由、衆議所候也、恐々謹言、

(惠鑰)
七月廿四辰刻 年預五師、

謹上 大勸進上人御房

五三―三 僧信性書状

御下向後何条候事哉、

おほつかなく存候、兼又迎

給候はん事、定日を自是

可申候、京中の今明折節、早

馬なんと申候て、馬も心苦覚

候、又大般若事、年預所へハ

申入させ給て候けるやらん、

不沙汰覚候、いたつらにミタ

れゆいをきて候へハ、身二もち

て候て、取合て、一部なして後

には、寺門御用ニ立候へく候、併

興隆ニこそ存候へ、折節又大

般若案誦之仁候へハ相談候て、可

被沙汰候間、急令申候、毎事期後

信候、恐々謹言、

(奥端切封)
十二月八日 信性

「大仏殿大般若 信戒御房 信性

建武二十二

五三―四 東大寺八幡宮神主周防守延広注進状

(端裏書)
「神輿御鳴物事 東寺御坐時 康永三十九」

注進

東大寺 八幡宮御神輿并

武内御神木於東寺御鳴動事

今月七日亥刻

同卯刻

右警固武士等依驚申、注進如件、

康永三年九月十日 神主周防守延広

五三―五 迎口書状

又先度申上候、被懸御意
之由承候、悦入候、同氣遣候ハ、
返々為悦候、

便宜悦申候

(美濃大井莊)

抑楽田・高橋延引用途并検断

事、勧修寺殿申候のほとに、

奉行返事加様候、可有御一見

候、何も無相違候へハ悦入候、池田殿

力者を入候敷など伝承候、以外候、

此状か様候へハ、定両郷給主も申下候覧、

若尚子細申候ハ、重委細可承候、

此上ハ、こなたの使催促仕候へと

仰候て可給候、自是も申候也、

此勧修寺殿御状ハ、早々可返給候也、

色々進候余事候へハ、請取の

様ニ候へハ、可被置候、便宜ニ必可給候、

彼両郷司事、追可有沙汰之由、

院家ニ内々被仰候也、

一、此間、更色々成物無沙汰候、以外候、何様

事候哉、此上ハ無力難月時分

候とも、厳密御使可被入沙汰候、

返々付公私無勿躰候、忝此時分

候、旁究済沙汰候ハ、為公方為庄家

目出存候、何も同風晴を

申下候、又同風晴庄家よりも申上候
物のなり候ハぬも同篇候、めつらしき

御沙汰候ハ、付惣別非本意候之間、

今までハ無其儀候ツ、庄家も惣別遠慮

沙汰候ハ、目出度候、清家定大概

申候つらん、毎事期後信之時候、

恐々謹言、

卯月十一日

迎☒(花押)

下司殿



五三―六 美濃大井莊下司代堯円書状

態以飛脚申入候、抑自去

夏比、会料御方事、可為成拔之

沙汰之由、定申候之处、両沙

汰人于庄家披露候者、会料

成拔段不可然之旨、及惣寺沙汰

候之間、可為難儀敷被申候、実事

御事候哉、念々承御左右、可

其旨存候、兼又此間依路次之

煩、于今会料不申運上候、

驚歎存候、公方并下司荷

立候次ニ可運上申候、彼方ニも

路までの兵士事申て候、同

御寺よりも可御兵士給候、

以此旨、可有御披露候、恐々

謹言、

(鎌倉末期カ)
十一月廿四日

僧堯円 (花押)

謹上 執行所御童子

五三―七 蒲御厨代官大河内真家書状

蒲へ下向候上使、即令上洛候、国之
時儀、定くわしく可被申上候

間、不能巨細候、よつてたんせん

廿貫文、御年貢十貫文、合

卅貫文到来候間、雑掌池田方へ

渡申候、定注進可被申候、彼之

段錢之子細、於国巨細申之由、

注進申候、同私へ状、乍恐為

御披見進入仕候、やかて返

被下候ハ、可畏入候、左候間、已前

申候御奉書を、早々御申候て、

可被下候、一段以次御沙汰候者、

末代可然候と存候、早々雑掌

方へかたく可被仰付候、委細者、

上使国之時儀、可有御尋候、

此之旨よく、可有御披露候、

恐惶謹言、

(寛正年間)
十一月卅日

(大河内)
真家 (花押)

戒壇院侍者御中

五四―一 古市訓禅書状

※東大寺文書未成卷文書一―二四―六六八参照

なほ、(藤内カ) 後年よりハ

うけ状ニまかせて

下人にて候物を

のけ候へく候、

かしこまで申入候、さてハ

たつ市(辰)のさく所(藤内カ)の事、今

年はかりハとうない入道二つ

くらせられ候へきよし、う

け給候へハ悦入候、(此旨)此旨やかて

御返事を申たく候しかとも、

かの入道他行して、今日

(左右)さうを申して候程ニ、于今、

此旨ハ申入す候へく候、さ候ハ、

今年はかりにて候も、つくり候

へきよし申候、すきな(不法)んと

して候ニ、いかなるふほう(か)をつ□

まつりて候へハ、めし上候ニ、人の

おもひにめんほく候ハぬ分にて候よし

申候、後年ニをき候てハこそと

やめさせて候へく候、もし猶も

いわれ候ぬ事を申候ハ、
身か方へうけ給候て、子細を申
させましく候、あなかしく、
(貞治二年)
潤月廿日 訓禪上(花押)

(奥端切封)
「古市御状 貞治二年

顕覚御房申まいらせ入候へ 訓禪上」

五四―二 古市訓禪書状

猶々わかき物を
まいらせて申候也、
くハしく申候はぬ也、
心もとなく候、
きのふ御ふミ給候、ならいの
たの事ハ、よの田ニハかわり候て、
(未進)
ミしんなく候ハ、いつまでも
つくらすへきけいやくを
したる物にて候へハ、(御姓)
御つくらせ
候へく候、もとのひやくしやうか
つくり候ハ、候、(寄進状)
きしんしやうを
御かゑしあるへきよし、ねき
申候、そのうゑハ、ちからなき事にて候、
このひやくしやうを御うたかい
候ハ、ミしんあらハ、とりあけられ

申へきとゆう状をせさせ

られ候へく候、なにさま此ほと二

ならゑのほり候ハ、(戒壇院)
すれハ、かい

たんいんのちやうらうに申候へく候、

又よそほかのたにて候とも、これ

らのけにんニ御つくらせ候て、

給候へと申上候、さこそ御

入候ハんすらんとおりいまいらせ候、

ましてや、これよりの田の

事にて候へハ、もとのひやく

しやうに御つくらせ候へく候、

あなかしく

(奥端切封)
「れうかい殿御返事 ふるいち」
(楞伽院)

五四―三 興福寺僧円重書状

先日被仰出候、慈恩寺
賢覚房借物事、理致
眼前事候之間、令披露所存
申候き、而御口入之間、旁加
斟酌候、且始終両寺不和
基候間、可閤之候、委細之趣、
被披露申行観房候敷、
以此旨、可然之様、可令洩達

給候、恐々謹言、

応安四卯月二日

円重

順観御房

〔自西院東室殿之状応安四卯月二日

東大寺順観御房

円重

」

五四―四 小山如然書状

※大日本古文書東大寺文書之二一第一五六五号・一六三六号参

〔裏紙奥ウツ書〕

「康応元己巳 十二月 日

三位五師御房、小山へ被下返事、出納給分ヲ被上事ヲ惣
寺ヨリ被尋、更々無其義ト云々」

御札之旨巨細令拝見候了、

抑只今蒙仰候、出納之

題目之事、無相違候、

若又替子細候者、重

可令言上候、恐惶謹言、

十二月七日

××

（花押）



五四―五 伝奏曇寂（広橋仲光）奉書案

※大日本史料七編五冊応永八年十一月九日条に別案。同文によ

（端裏書）

「案文」

五四―六 僧叡春書状案

〔端裏書〕

「叡春状案文」

愚身留守之間事、加賀阿闍梨

卿公ニ申おきて候、愚身之用ニ料足

事申され候ハ、彼兩人之借書にて

預御秘計候ハ、悦入候、為後日、此状

令進之候、恐惶謹言、
応永廿七年庚子七月四日 叡春在判

五四―七 某書状（切紙）

貴札即拝見、恐悦之至候、

仍本僧坊供并焼米、于今

無沙汰仕候哉、曲事ニ存候、

急度相尋可申付候、不可存

疎意候、此等之趣、可然様ニ御

衆中へ御披露所仰候、

恐々謹言、

（室町後期）

九月十五日 英（花押）

本僧坊供御納所御房

御返報

五四―八 前権僧正公円書状

※この文書は京都青蓮院の關係文書であろう。前権僧正公円は、

天台座主青蓮院門跡である。権僧正を辞退するのは建保四年

六月である。

六箇庄宇佐役事、庄官等重申状進覽之、且庄官可参候、可尋聞食候、免除之由相構、可被□

候、為御年貢違乱出来候

事、尤不便次第候歟、近代

御沙汰、諸事遅々之由承候、

不便事候、恐々謹言、

(鎌倉中期) 七月十九日 前権僧正公円

五四―九 某書状

※鎌倉遺文一四四八五に別写本、同文により省略。鎌倉遺文一四四一三参照。

五四―一〇 後醍醐天皇綸旨

大勸進職事、被

補本光上人、可存知之由

可有御下知寺家之旨、

被仰下候也、仍上啓如件、

誠恐謹言、

(建武二年カ) 三月廿九日 参議(三条)実治(東南院聖珍カ) 謹上 東大寺別当僧正御坊

未成巻―一 大井莊検注名寄帳(前後欠)

※五―一号(鎌倉遺文一八八五六)および一七―四号(同一八八五八)に接続。五―一号前半(鎌倉遺文刊本二五冊七八頁下段「除屋敷五反」まで)↓本断簡↓一七―四号↓五―一号後半(刊本二五冊七八頁下段「除五段小卅歩」から)。

定田小

蕨田六升

新田六升 分一尺三寸三分巳御年貢

一、清次堺殿

已上一丁三反半 田七反

畠六反六十歩

除一丁一反九十歩 田五反

畠六反九十歩

八講僧膳料二丁内

定二反九十歩己酉

例一反卅歩 分一丈三尺巳会料

新田一反六十歩 分九尺三寸三分巳御年貢

一、十楽 □□□

弥三〇殿

田一丁二反大

已上二丁一反半 畠七反三百歩

竹一反

除一丁四反半

彼岸田八段 已田元丁内
 元丁内 田半
 屋敷六反半 竹一反 畠五反
 定七反
 田四反六十歩
 間大 分五尺三寸四分
 例一反小冊 分一丈七尺
 已上二丈二尺三寸四分已会料
 新田一反冊 分一丈六尺已御年貢
 未成巻―二 尼真妙書状（前後欠）
 ※酒井紀美「ニ真妙かな書状」について（『鎌倉遺文研究三〇、二〇一二年〕にて復元翻刻。
 別置 嘉保二年七月二十九日相撲日記
 ※大日本史料三編之三、八五二頁以下
 影写本 新最勝講方読誦衆交名
 （端裏書）
 「新最勝講方 康正三年丁丑自正月至六月分」
 康正三年丁丑
 正月
 朔日、上五巻、隆安 下五巻、定俊
 二日、上五巻、隆晏 下五巻、定俊

三日、上五巻、隆安	下五巻、定俊
四日、上五巻、隆安	下五巻、定俊
五日、上五巻、隆晏	下五巻、定俊
六日、上五巻、順実	下五巻、珍賢
七日、上五巻、順実	下五巻、珍賢
八日、上五巻、順実	下五巻、珍賢
九日、上五巻、順実	下五巻、珍賢
十日、上五巻、順実	下五巻、珍賢
十一日、上五巻、重円	下五巻、経舜
十二日、上五巻、重円	下五巻、経舜
十三日、上五巻、重円	下五巻、経舜
十四日、上五巻、重円	下五巻、経舜
十五日、上五巻、重円	下五巻、経舜
十六日、上五巻、覚延	下五巻、祐栄
十七日、上五巻、覚延	下五巻、祐栄
十八日、上五巻、覚延	下五巻、祐栄
十九日、上五巻、覚延	下五巻、祐栄
二十日、上五巻、覚延	下五巻、祐栄
廿一日、上五巻、亮信	下五巻、祐春
廿二日、上五巻、亮信	下五巻、祐春
廿三日、上五巻、亮信	下五巻、祐春
廿四日、上五巻、亮信	下五巻、祐春
廿五日、上五巻、亮信	下五巻、祐春
廿六日、上五巻、重誉	下五巻、盛海

十九日、上五卷、 覚延	十八日、上五卷、 覚延	十七日、上五卷、 覚延	十六日、上五卷、 覚延	十五日、上五卷、 重円	十四日、上五卷、 重円	十三日、上五卷、 重円	十二日、上五卷、 重円	十一日、上五卷、 重円	十日、上五卷、 順実	九日、上五卷、 順実	八日、上五卷、 順実	七日、上五卷、 順実	六日、上五卷、 順実	五日、上五卷、 隆晏	四日、上五卷、 隆晏	三日、上五卷、 隆晏	二日、上五卷、 隆晏	一日、上五卷、 隆晏	二月		廿九日、上五卷、 重誉	廿八日、上五卷、 重誉	廿七日、上五卷、 重誉
下五卷、 祐栄	下五卷、 祐栄	下五卷、 祐栄	下五卷、 祐栄	下五卷、 経舜	下五卷、 経舜	下五卷、 経舜	下五卷、 経舜	下五卷、 経舜	下五卷、 玠賢	下五卷、 玠賢	下五卷、 玠賢	下五卷、 玠賢	下五卷、 玠賢	下五卷、 定俊	下五卷、 定俊	下五卷、 定俊	下五卷、 定俊	下五卷、 定俊			下五卷、 盛海	下五卷、 盛海	下五卷、 盛海
十一日、上五卷、 重円	十日、上五卷、 順実	九日、上五卷、 順実	八日、上五卷、 順実	七日、上五卷、 順実	六日、上五卷、 順実	五日、上五卷、 隆晏	四日、上五卷、 隆晏	三日、上五卷、 隆晏	二日、上五卷、 隆晏	一日、上五卷、 隆晏	三月		卅日、上五卷、 重誉	廿九日、上五卷、 重誉	廿八日、上五卷、 重誉	廿七日、上五卷、 重誉	廿六日、上五卷、 重誉	廿五日、上五卷、 亮信	廿四日、上五卷、 亮信	廿三日、上五卷、 亮信	廿二日、上五卷、 亮信	廿一日、上五卷、 亮信	廿日、上五卷、 覚延
下五卷、 経舜	下五卷、 玠賢	下五卷、 玠賢	下五卷、 玠賢	下五卷、 玠賢	下五卷、 玠賢	下五卷、 定俊	下五卷、 定俊	下五卷、 定俊	下五卷、 定俊	下五卷、 定俊			下五卷、 盛海	下五卷、 盛海	下五卷、 盛海	下五卷、 盛海	下五卷、 盛海	下五卷、 祐春	下五卷、 祐春	下五卷、 祐春	下五卷、 祐春	下五卷、 祐春	下五卷、 祐栄

四日、上五卷、隆晏	三日、上五卷、隆晏	二日、上五卷、隆晏	一日、上五卷、隆晏	四月		廿九日、上五卷、重誉	廿八日、上五卷、重誉	廿七日、上五卷、重誉	廿六日、上五卷、重誉	廿五日、上五卷、亮信	廿四日、上五卷、亮信	廿三日、上五卷、亮信	廿二日、上五卷、亮信	廿一日、上五卷、亮信	廿日、上五卷、亮延	十九日、上五卷、亮延	十八日、上五卷、亮延	十七日、上五卷、亮延	十六日、上五卷、亮延	十五日、上五卷、重円	十四日、上五卷、重円	十三日、上五卷、重円	十二日、上五卷、重円
下五卷、定俊	下五卷、定俊	下五卷、定俊	下五卷、定俊			下五卷、盛海	下五卷、盛海	下五卷、盛海	下五卷、盛海	下五卷、祐春	下五卷、祐春	下五卷、祐春	下五卷、祐春	下五卷、祐春	下五卷、祐栄	下五卷、祐栄	下五卷、祐栄	下五卷、祐栄	下五卷、祐栄	下五卷、経舜	下五卷、経舜	下五卷、経舜	下五卷、経舜
廿八日、上五卷、重誉	廿七日、上五卷、重誉	廿六日、上五卷、重誉	廿五日、上五卷、亮信	廿四日、上五卷、亮信	廿三日、上五卷、亮信	廿二日、上五卷、亮信	廿一日、上五卷、亮信	廿日、上五卷、亮延	十九日、上五卷、亮延	十八日、上五卷、亮延	十七日、上五卷、亮延	十六日、上五卷、亮延	十五日、上五卷、重円	十四日、上五卷、重円	十三日、上五卷、重円	十二日、上五卷、重円	十一日、上五卷、重円	十日、上五卷、順実	九日、上五卷、順実	八日、上五卷、順実	七日、上五卷、順実	六日、上五卷、順実	五日、上五卷、隆晏
下五卷、盛海	下五卷、盛海	下五卷、盛海	下五卷、祐春	下五卷、祐春	下五卷、祐春	下五卷、祐春	下五卷、祐春	下五卷、祐栄	下五卷、祐栄	下五卷、祐栄	下五卷、祐栄	下五卷、経舜	下五卷、経舜	下五卷、経舜	下五卷、経舜	下五卷、経舜	下五卷、経舜	下五卷、玠賢	下五卷、玠賢	下五卷、玠賢	下五卷、玠賢	下五卷、玠賢	下五卷、定俊

[illegible]